

日蓮正宗で行う朝夕の勤行で読む御経の話

法華経は全部で 28 の章によって構成されていますが、日蓮正宗では日蓮大聖人の時代より朝夕の勤行は法華経の前半 14 品（迹門）の中心をなす方便品第 2 と、後半 14 品（本門）の中心をなす壽量品第 16 と、法華経の肝心である南無妙法蓮華経の御題目を何遍も重ねて読むのであります。

前半の中心をなす、方便品第 2 は、それまで説かれる事がなかった、仏の生命と一切衆生の生命（人間を含む人間以外の生命全て）の絶対の平等が説かれています。

後半の中心をなす、壽量品第 16 は、その絶対平等の鍵となる理由を、仏の生命の本質も、一切衆生の生命の本質も、皆、妙法蓮華経の仏の生命であることを明かして、仏がこの世の中に生まれてきた最大最高の目的である、一切衆生の成仏は、この法によって叶う事を示しているのであります。

ですから、勤行の最後に、全ての法の肝心である、南無妙法蓮華経の御題目を何遍も重ねて自らに言い聞かせる様に、仏の生命を自覚する様に読むのであります。

法華経は、釈尊が説いたのだから、説いた釈尊こそが根本の本尊とされるべきが当然と考える人々が社会全般の考え方です。しかし、法華経を素直に読めば、法華経の前半の迹門は釈尊が生きていた在世を中心とした教えであり、後半の本門は、釈尊自身が釈尊滅後南無妙法蓮華経の御題目を中心に信仰し伝え、流布していく事を示しているのであります。つまり、法華経は釈尊が説いた教えであると同時に、釈尊が我々と同じ人間として修行していた時に悟った法であり、釈尊自身が創造した教えではないのであります。ですから、日蓮大聖人は釈尊を本尊とするのではなく、一切の諸仏が悟った南無妙法蓮華経の御題目を中心にした本尊を顕し、法華経の行者として生きる事により、誰でも成仏できることを法華経の文の底から導き示したのであります。釈尊を本尊として信仰をしても釈尊の様に仏になる事は出来ない。釈尊が信仰していた南無妙法蓮華経の法を本尊とする事により、自分の生命に具わる南無妙法蓮華経の仏性を認識する事が出来ることを示されたのであります。

故に、方便品第 2 は「所破借文しよはしゃくもん」（文を借りて、この教えでは、まだまだ真の成仏は出来ませんよと、借りて、挙げ、示して破る為に読みます。）

壽量品第 16 は「所破所有しよはしよゆう」（釈尊を主人公にした法華経は破折し、壽量品の経文を通じて文の底の一切の法の源である一切の諸仏が悟った妙法蓮華経の法を導き出す為に所有とする）

一般に勤行というと、御経を読む事がイメージされますが、勤行の中心は南無妙法蓮華経の御題目であります。御題目が【薬】（正行しょうぎょう）御経が【説明書】（助行じょぎょう）という関係であります。説明書は御題目がいかにか大切であるかの成分説明と、どういう飲み方をしなければいけないのかが書かれています。私たち凡夫は、勤行をした時は、なる程そうだと、納得しても、すぐ迷い、忘れてしまいます。ですから毎日毎日朝夕同じ御経を勤行をして、忘れたら思い出し、忘れたら思い出すように勤行を励行しなければいけないのであります。

誰が聴いても、何を言っているのか分かる発音とスピードで勤行する事が大切です。やとっけば良いんでしょという様な早回し、早送りの様な、粗雑で、途中で何座目か分からなくなったり、三回繰り返す十如是（世雄偈を読む場合は三回繰り返す事をしません。空仮中の三転読みと言いますが、本当にそうであれば、世雄偈を入れて読経する時も三転読みしなければならぬはずであります。世雄偈を省略読みをする意味で三転読みをし、世雄偈に替えている意味であります。）が何回目か分からなくなるような消化するだけの自己満足の勤行はいけません。

メトロノームが同じリズムを刻む様に、最初から最後まで同じリズムで読み、自分が読み易い所は速く、読みにくい所は遅かったり、つかつかつたりしないように読みましょう。

浪花節の様な絞った発音や、合掌の手を口の前に押し当てて、自分の声を反響させると、他の人には、発音のはっきりしない、くぐもった声にもかかわらず、自分の耳には良く聞こえるので自分の声に酔いしれたり、他の人が自分のリズムに合わせれば良いんだと、自己中心に考えないで、あくまでも勤行は本尊、仏を主体にして仏と向かい合い成されなければいけない修行ですから、一同で唱和出来ない様な癖のある節やリズム、速度、大声で他人の声が聞こえない勤行の仕方をしないで、8割の声で、他人の声リズムを聴きながら、自分の声と調和させながら、導師、大衆、御互いが唱和する様に全員が努力しなければいけません。法要、葬儀、法事、普段の勤行、どの場面の勤行でも同じ速度、テンポで、信仰をしていない方が聞いても分かる、初めての人も、誰でも唱和出来る読み方が正常な勤行であります。例えば、歌手や演技者は、自分だけで練習する時も千人の客の前の本番で歌う時も、演技する時も、同じ速さ、テンポで歌いセリフを言います。一人でやる時は速く、客が多い時には、ゆっくり朗々という使い分けは、あつてはならない事なのであります。

各宗各派に於いては、わざわざ自宗の特異性を恣意するために自宗独自の上げたり、下げたり、捻ったりの節回しを記号付きで行う所もありますが、誰でも読める御経を、わざと読めない様にしている愚かな行為だと感じます。

御経は、現代の様に拡声器の無かった時代。100人 1000人 10000人の人々でも唱和する事が出来る様に作られているのであります。現代は拡声器で無理矢理強引に早口早回しの速度で引っ張っているのであります。拡声器がなければ唱和出来ないという、本来の読経の仕方から完全に逸脱しているのであります。（日蓮宗のような木鉦を叩いてリズムを取り唱和するという様な事も昔は無かったのであります。）

御経は早口で速く、唱題は太鼓のリズムでゆっくり唱えるという、御経と唱題の速さが違う事が当たり前の様になっていますが、御経と唱題は同じ速さテンポでなければ勤行として一体化していないのであります。創価学会は早口の読経と唱題を同じ速さにし、速さでは辻褄が合っていますが、どちらも、何を言っているのか分からなくし、どちらも駄目にしてしまいました。

御経を早口早回しで読む為に、最初からトップスピードで読めませんから、

みよ～ほ～れんげ～きよ～、ほ～べんぼんだいに～

と、最初はゆっくりネジを巻くように入り、

に一じーせーそんじゅーさんまい

と、一気に早口早回しの崩し御経になっていくのであります。

最後も、早口早回しのままブツンと終わる事は出来ませんので、導師によってゆっくりになる箇所と延ばし方はバラバラですが、平均的には、

い～が～りよ～しゅ～じょ～～～。

とくにゆ～む～じょ～ど～～～。

そくじょうじゅ。ぶっし～～～～ん。

と、早口早回しの読経から、急速にスローモーションになり、最後を導師の個性に準じて延ばすのであります。ですから常に最初と最後は読経唱和がバラバラになるのであります。最初も最後も雨垂れ経の同じテンポで行えば、最初から最後まで同調唱和が出来、バラバラにならないのに、このバラバラになる事にも、長年にわたって何の問題改善意識も無く、漫然と続けているのであります。

読経を唱題の太鼓と同じ速さとテンポに合わせる事が正しい勤行のあり方なのであります。

御本尊様の【妙】の字を中心に視線を合わせ、心を集中させ勤行をする。テレビやラジオを視聴しながら勤行は出来ません。ですから、御本尊様の近くに、勤行中、気が散るものを置かない。

読経唱題をしながら、仏具を動かしたり、櫛を触ったり、灰を搔いたり、掃除をしたり、子供に注意の大声を出したり、携帯電話をさわったり勤行以外の色々な行動をしない。御経の時は、間違っはいけないと、経本を見て、気を付けなければいけませんから余所見をしたり、雑念を起こし、いらぬ事をしたりする人は少ないですが、御題目を唱えながら御題目を間違える事は有り得ないので、御題目を唱えながら、御題目と全く違う事を考え行動する雑念が当たり前の平気になっている人が多いのであります。

御経を暗記していても、字や教えの内容まで暗記している人はいません。正確に唱える為にも、教えを心に浮かべる為にも、御経本を注視して勤行しましょう。同様に御題目を唱える時は、南無妙法蓮華経の事だけを念じて、他の行動をせず、唱えなければいけません。勤行の根幹は御題目なのだからです。

良く考えてみると、仏が我々衆生に説法した御経を、我々凡夫が御本尊（仏）に向かって毎日、同じ御経を唱える事は、「仏に説法」で、おかしい構図になります。これは、私たちの口・舌・喉を使って出た声が、自分の耳に入ってくる時には、仏の説法として耳から入り心に染まっていく状況を作っているのであります。つまり、常に仏の説法の場に臨み、「あなたには元来仏の生命が具わっている。その仏の生命を見失わないで、仏の生命が具わっているにふさわしい法華経の行者としての生き方をしなければいけない。」と、方便品、壽量品、南無妙法蓮華経の御題目を唱え、聴くことによって自覚し、信心の心根が深まり広く張って行く為に勤行をしているのであります。

御題目は、「一遍でも少なからず、千遍でも多からず。」と言われ、一遍の御題目を寶を磨くように唱える事が大切です。しかし、凡夫は一遍唱えただけでは一遍の大切さは分からないのであります。私は、出来るだけ御題目は 15 分以上唱え、勤行の中心は御題目である事と、唱えながらも唱えたくないと感じる己の煩惱と向き合い、凡夫の愚かさを自

覚し、怠惰な迷いの心乗り越える修行を心身で感じるように心掛けて頂きたいと思いません。3分5分では、その事を感じる事も無く、勤行の中心は御題目なんだという意識も生じないでしょうし、十界互具の中の六道の生命、仏界の生命を微かにでも感じる事が出来ないで終わってしまうと思います。

朝夕の勤行は日蓮大聖人当時の原形は、天拝(諸天善神への法味を供える)、方便品、方便品世雄偈、壽量品長行、自我偈、唱題でした。後年、日蓮大聖人が亡くなられ二座が加わり、日興上人が亡くなられ、三座が加えられと、五座、三座に増加しました。創価学会が誕生するまでは、世雄偈を丑寅勤行でも読んでいましたが、創価学会に創価学会員は毎日の生活と仕事に忙しいので御経を短くしてくれという要望に、当時の大石寺僧侶は、日蓮大聖人が唱えていた世雄偈の法門の重要性を深く考えることをせず、僧侶も、渡りに船、世雄偈は長くて面倒、迹門、方便品だからと、日常朝夕の勤行から削除してしまったのであります。省略すべきは五座、三座の方で、世雄偈を入れた日蓮大聖人当初の勤行様式原形の初座、二座の勤行を守るべきであったと思います。何故ならば、五座、三座の勤行を義務の仕事のように片付ける為に、横行している意味不明の呪文の様な早口早回り勤行が当たり前になり、個人で行う勤行は早く崩し、法要時の勤行は朗々とゆっくり行うという使い分けが当然の様に行われているのであります。まず一人一人が自己を振り返り、自分のやっている勤行の姿を疑問に感じなければいけないはずであります。

日蓮大聖人が亡くなられ、一座増え。日興上人が亡くなられ、一座増え。日目上人が亡くなられ、一座増え。という風に五座、三座の勤行形態が出来たのであります。勤行の原形である。方便品、世雄偈、壽量品長行、自我偈、御題目を唱え、五座、三座の観念は重要ですから、御題目三唱で繋いで行う形態にする事が必要なのであります。日蓮大聖人が唱えられていたと同じ勤行を、どんなに時代が変わっても同様に唱和することが、日蓮大聖人門下の当然の姿であります。そうすれば、組織団体の規則や強制ではなく、一人一人の信仰者が、何故、日蓮大聖人が【世雄偈】を読まれていたのか、その意義を考え、自分自身の信仰の志として読み始める事によって、【宗風の刷新】【祖道の恢復】は確実に一歩進むのであります。

日目上人が亡くなられて以降の時代に、朝夕の勤行は、天拝は、垂迹堂で、二座は御影堂で、三座は客殿で、という様に、雨の日も風の日も、各御堂を経巡って一座一座御経を唱えるという事をしていた時代があります。御経が終わると、御題目を50遍、100遍と唱えて、次の御堂に向かうという事をしていました。しかし、これは大変な事ですので、同じ場所で五座、三座をするようになったのであります。勤行の後の引き題目は、この時代的一座毎の50遍100遍の題目を表していると言われていました。又、過去現在未来三世常住に南無妙法蓮華経の御題目が及ぶように御題目を引くとも言われています。しかし、この引き題目は、

な～～む～～。

みよ～～ほ～～れ～～ん～～げ～～きよ～～な～～む～～。

みよ～～ほ～～れ～～ん～～げ～～きよ～～な～～む～～。

みよ～～ほ～～れ～～ん～～げ～～きよ～～。

この様に引き延ばして唱えます。人によっては3分5分と延ばします。そうすると当然、今、何をどこを読んでいるのか、どこで切って、どこで息継ぎをしているのか、な~~~~（息継ぎ）な~~

というような、伸ばし過ぎて、南無妙法蓮華經の御題目になっていない状態で、何の為にやっているのか分からなくなります。誰が聞いても、南無妙法蓮華經を長めに唱えているんだなという事が分からなければ、南無妙法蓮華經の御題目とは言えないのであります。そんな事ならば、引き題目を止めて、3分5分唱題する方が余程、勤行の意義に叶っていると考えます。南無妙法蓮華經と分かる程度の延ばし方が、勤行の尊厳を崩さない為の許容範囲ではないかと思えます。勤行を自己満足、自己表現、恣意行為のパフォーマンスに使うべきではないと考えます。

又、最後の、

きよ~~

を以上に延ばし、全体の唱和をバラバラにする人がいます。

きよ~~~~

と、したり、

きよ~~~~っ

と、最後に御釣りを付ける人がいます。

また、本人は、なんみよ~~と唱えているつもりでしょうが、誰が聞いても、

なんによ~~

しか聞こえないとか、浪花節の様に声を絞り、吠えるように唱え、「何故皆は、私の様に生命力にあふれたダイナミックな御題目を唱えないんだ。」と、独善で訴える人が、創価学会員の中によくいますが、勤行を唱和するものでなく、個人がリードするものだと考え、この基本的な欠陥を正しいと思い込んでいるのであります。

こういう唱え方をすれば、その人自身は、他人よりも重々しく、立派そうに聞こえるようにと考えて行っても全体の唱和を混乱させるだけで、現実には一人だけ浮いた軽々しく、貧弱な御題目で終わってしまっているのであります。

読経、唱題、三唱、引き題目も、自分の声を録音し、自分がどのように発音しているのかを、客観的に聞いてみれば、いかに唱和にそぐわない発音で、自己満足、自己陶醉になっている、自己顕示欲の恥を感じるはずであります。

日蓮正宗では、御題目三唱を、

なんみよー ほー れーん げー きよー

なんみよー ほー れーん げー きよー

なんみよー ほー れーん げー きよーー

と唱えます。

身延系日蓮宗の方々は、南無妙法蓮華經の御題目を、

なむ みよー ほー れん げー きよー

なむ みよー ほー れん げー きよー

なむ みよー ほー れん げー きよーー

と唱え、これが正しい御題目の唱え方で、日蓮正宗は間違った唱え方だと言います。

活字の振り仮名と発音時の現実の振り仮名は当然違いが出て来ます。発音する際に、発音しやすいように角が取れます。そして南無妙法蓮華經の御題目は南・無・妙・法・蓮・華・經の一字一字をくっつけて七文字にしたのではなく、南無妙法蓮華經一体が御題目なのであります。

日蓮宗は、

「なむ」の「む」に拘りますが、「みょう」の「う」、「ほう」の「う」、「きょう」の「う」には無頓着で拘りません。矛盾しています。

活字の振り仮名に忠実に正しく読むと言うならば、

なむ みょう ほう れん げー きょうー

と読まなければいけないはずであります。誰も、その様に読んでいません。

「なむ」の「む」だけに拘り、あとの三つの「う」は発音しやすいように消去して読むという事は、辻褄の合わない行為であります。

日蓮宗の方々も御題目を百回千回と唱えた時、自然と、

なんみよー ほー れーん げー きよー

と、自然に唱え易い発音になっていく事に気付くはずであります。

拘っても、なんら信仰上の意味も価値もありません。「む」に拘らなければ、南無妙法蓮華經の御題目にならないということはないのであります。他宗か自宗かの識別の為に拘っているとすれば、信仰を中心としているのではなく、組織を中心とした考え方になっている事となります。

日蓮正宗も現実の発音重視と言いながら、何十年と振り仮名通りになっていない、曖昧な状態になっている事に気付いていません。

日蓮正宗も御経本の妙法蓮華經の振り仮名を

みょうほうれんげーきょう

としているにも関わらず、

みよーほーれんげーきよー

と読んでいるのであります。御経本の中には実際には「う」を読まないで、前の語をそのまま延ばす「ー」にしなければいけない箇所が多数あります。

実際に読んでいる読み方に順じて振り仮名を付けているはずが、現実には気付かないで何十年も実際にはそうならない振り仮名を振って来たのであります。

今、ここに、その事に対して、この自己矛盾から脱皮して、「う」を「ー」に振り仮名表記を改正しました。

※これから示す発音のふりがなは一般書物のふりがなではなく読経の為の口唱を表現していますので、【ー】は伸ばす、【ッ】は、声を詰まらせ縮ませる事を表現しています。

妙法蓮華經(みよーほーれんげーきよー myo- ho- ren ge- kyo-)。

方便品(ほーべんぽん ho- ben pon)。

第二(だいにー dai ni-)。

爾時世尊(にーじーせーそん ni- ji- se- son)。

従三昧(じゅーさんまい ju- san mai)。

安詳而起(あんじょーに一きー an jo- ni- ki-)。

告舍利弗(ごーしゃりほつ go- sharihotsu)。

【嘘も方便】と言う諺がありますが、嘘と方便は全く違います。嘘は偽りですが、方便は、真実の法に向かわせる為の段階の教えであります。畑に種を植える前に、畑を耕し、栄養を入れ、土作りをして種を蒔かなければ、種は育たないのであります。その土作りの段階が方便の教えであります。

その時に釈尊は三昧(悟りの境地)から安詳(穏やかで静かな慈悲の心を持って)として立ち上がり、説法場に集っている人々の代表である舍利弗に話しかけた。

諸仏智慧(しょーぶっちーえー sho- bu^{chi}- e-)。

甚深無量(じんじんむーりょー jin jin mu-ryo-)。

其智慧門(ごーちーえーもん go- chi- e- mon)。

難解難入(なんげーなんにゆー nan ge- nan nyu-)。

南無妙法蓮華經の法によって成仏した全ての仏の智慧は、はなはだ深くて、凡夫には計り知る事が出来ません。その智慧の入り口の門をくぐる事さえ欲望を中心に考える凡夫には、理解する事が難しく、入りにくいのです。

一切声聞(いっさいしょーもん i^{sai} sho- mon)。

辟支仏(ひやくしーぶつ hyaku shi- butsu)。

所不能知(しょーふーのーちー sho- fu- no- chi-)。

一切の声聞(仏の説法を一度聴いただけでも理解する事が出来る賢い人)も、辟支仏(仏から教えを聴かなくても、風の動き、水の流れ、季節の移り変わり、植物、動物の姿を見るだけで、一人で悟りを得る事が出来る人)の立場の人であっても、この一段深い南無妙法蓮華經の法を悟る事は出来ません。

所以者何(しょーいーしゃーがー sho- i- sha- ga-)。

仏會親近(ぶつぞーしんごん butsu zo- shin gon)。

百千萬億(ひやくせんまんのく hyaku sen man noku)。

無数諸仏(むーしゅーしょーぶつ mu- shu- sho- butsu)。

盡行諸仏(じんぎょーしょーぶつ jin gyo- sho- butsu)。

無量道法(むーりょーどーほー mu- ryo- do- ho-)。

勇猛精進(ゆーみょーしょーじん yu- myo- sho- jin)。

名稱普聞(みょーしょーふーもん myo- sho- fu- mon)。

成就甚深(じょーじゅーじんじん jo- ju- jin jin)。

未曾有法(みーぞーうーほー mi- zo- u- ho-)。

隨宜所説(ずいぎーしょーせつ zui gi- sho- setsu)。

意趣難解(いーしゅーなんげー i- shu- nan ge-)。

※所以者何という御経は何度も出て来ます。ゆえんはいかん。理由は何か。何故そうなる

のかという意味です。何度も何度も出てくるという事は、仏が、私たちに、分かったか、
こういうことだよ、と、何度も何度も確認を取りながら法華経が説かれているという事
あります。

何故声聞や辟支仏でも知る事が出来ないのか、その理由は、
仏は過去に百千萬億無数の諸仏に親近して、縁をして、色々な諸仏の説く所の無量の修行
の方法を行じ尽くして、どんなに辛い修行でも勇気を持って、怠けたり、やった振りをし
たりしないで、一生懸命退転無く励んだ、その結果、釈尊の名前は世の中に広く伝わった。
そして、甚だ深く未だかつてない南無妙法蓮華経の法を悟り成就した。仏はその悟った南
無妙法蓮華経の法を心のままに色々な因縁の話しにして自由に衆生に説いたが、仏の心は
理解される事がなかった。

舍利弗(しゃりほつ sharihotsu)

吾従成仏已来(ごーじゅーじょーぶついーらい go- ju- jo- butsu i- rai)。

種種因縁(しゅーじゅーいんねん shu- ju- in nen)。

種種譬喩(しゅーじゅーひーゆー shu- ju- hi- yu-)。

廣演言教(こーえんごんきょー ko- en gon kyo-)。

無数方便(むーしゅーほーべん mu- shu- ho- ben)。

引導衆生(いんどーしゅーじょー in do- shu- jo-)。

令離諸著(りょーりーしょーぢやく ryo- ri- sho- jaku)。

舍利弗よ、私は仏になってから今迄色々な因縁話、色々な譬喩話を用いて広く沢山の言葉
を使って、数え切れない方便を説いて、衆生を導き、自分の欲望を中心に生きようとする
執着から離れさせようとしてきました。

所以者何(しょーいーしゃーがー sho- i- sha- ga-)。

如来方便(にょーらいほーべん nyo- rai ho- ben)。

知見波羅密(ちーけんはらみつ chi- ken haramitsu)。

皆已具足(かいいーぐーそく kai i- gu- soku)。

舍利弗(しゃりほつ sharihotsu)。

如来知見(にょーらいちーけん nyo- rai chi- ken)。

廣大甚遠(こーだいじんのん ko- dai jin non)。

無量(むーりょー mu- ryo-)。

無礙(むーげー mu- ge-)。

力(りき riki)。

無所畏(むーしょーいー mu- sho- i-)。

禪定(ぜんじょー zen jo-)。

解脱三昧(げーだッさんまい ge- da^san mai)。

深入無際(じんにゅーむーさい jin nyu- mu- sai)。

成就一切(じょーじゅーいっさい jo- ju- i^sai)。

未曾有法(みーぞーうーほー mi- zo- u- ho-)。

理由は何かといえ。私は真実の教えに導く仮の教えである方便を説く力と、物事の本質、本性を見抜く知見波羅密という能力を皆既に備え持っているのです。私の物事の本質、本性を見抜く知見の能力は、広く、大きく、深く、遠く、誰もが計る事も出来ず、妨げる事も出来ず、説く為には何ものにも畏れない、迷いでブレずに定まった心で悟り、限らない智慧に入り、一切未曾有の未だかつて説かれた事のない南無妙法蓮華經の法を成就し、悟ったのであります。

舍利弗(しゃりほつ sharihotsu)。

如来能種種分別(にょらいのしゅじゅふんべつ nyo- rai no- shu- ju- fun betsu)。

巧説諸法(ぎょせつしよほ gyo- se^sho-ho-)。

言辭柔輒(ごんじにゅなん gon ji- nyu- nan)。

悅可衆心(えっかしゅしん e^ka- shu- shin)。

舍利弗(しゃりほつ sharihotsu)。

取要言之(しゅよごんし shu- yo- gon shi-)。

無量無辺(むりよむへん mu- ryo- mu- hen)。

未曾有法(みぞうほ mi- zo- u- ho-)。

仏悉成就(ぶつしつじょじゅ bu^shitsu jo- ju-)。

舍利弗よ、私は衆生に対して良く色々な教えを各々に会う様に分別して、巧みに諸々の法を説き、その説法での言葉は柔らかで、穏やかで、聴いている衆生の心を悦ばせました。舍利弗よ、一口で、この事を表現すれば、私は、無量無辺(量を量る事も、大きさ距離を量る事も出来ない)未だかつてなかった南無妙法蓮華經の法を、私は悉く悟り、仏として成就したのであります。

止舍利弗(ししゃりほつ shi- sharihotsu)。

不須復説(ふしゅぶせつ fu- shu- bu- setsu)。

所以者何(しよいしゃが sho- i- sha- ga-)。

仏所成就(ぶつしよじょじゅ bu^sho- jo- ju-)。

第一希有(だいいちけう dai ichi ke- u-)。

難解之法(なんげしほ nan ge- shi- ho-)。

唯仏與仏(ゆいぶつよぶつ yui butsu yo- butsu)。

乃能究盡(ないのくじん nai no- ku- jin)。

舍利弗よ、私の教えに自分の理解、自分の言葉を持って重ねて又、説く事を止めなさい。何故かと言え、私が悟り成就した南無妙法蓮華經の法は一切の教えの中でも一番希な法で、衆生が自分の智慧を持って理解しようとしても理解する事の出来ない法であります。唯、仏と仏の境涯(一切の教えの中で本当に成仏する事の出来る要の真実の一法を求め、自分の考えを入れず仏の法をそのまま信じ成仏したいと真剣に願う心。)を持つ者だけが、その法を信ずるといふ、思いを立てた、たった今、その瞬間に能く諸法(世の中の総ての法)の実相(あるがままの真実)を究め尽くすしか出来ない法だからであります。

諸法実相(しよほじつそ sho- ho- ji^sou)。

所謂諸法(しよーいーしよーほー sho- i- sho- ho-)。

如是相(にょーぜーそー nyo- ze- so-)。

如是性(にょーぜーしよー nyo- ze- sho-)。

如是體(にょーぜーたい nyo- ze- tai)。

如是力(にょーぜーりき nyo- ze- riki)。

如是作(にょーぜーさー nyo- ze- sa-)。

如是因(にょーぜーいん nyo- ze- in)。

如是縁(にょーぜーえん nyo- ze- en)。

如是果(にょーぜーかー nyo- ze- ka-)。

如是報(にょーぜーほー nyo- ze- ho-)。

如是本末究竟等(にょーぜーほんまツくーきょーとー nyo-ze-hon m^aku- kyo- to-)。

いわゆる仏の全ての振る舞いも、衆生の表面に表れる振る舞い(相)も、性分・性格(性)も、その体、生き方(体)も、能力(力)も、行動して、その事に関連していく作用(作)も、結果を生む直接的な原因(因)も、因と果を結ぶ縁(縁)も、色々な事柄が集まって生まれる結果(果)も、どういう結果が、人それぞれの立場立場で、どういう報いとなるのか、善意でやった事でも、悪意に取られる報いになったり、悪意でやったことでも善意に取られる事もある。(報)

この如是相、如是性、如是体、如是力、如是作、如是因、如是縁、如是果、如是報は、(10ありますから10如是と言います)仏も一切衆生もどんな生命でも、平等であり、究竟、つきつめて絶対の平等である。

つまり、米や花の十如是、仏の十如是、動物の十如是、衆生の十如是・・・・・・これ等の生命と作用が絡み合う様に繋がって、平等にお互いの生命を支え、支えられて存在し、南無妙法蓮華經の法を根本として、究竟、つきつめて絶対の平等なのであると示されているのであります。

だから、神がこの世の中を作ったなどという教えは仏教には無いのであります。

十如是のここまでは、説法する釈尊の立場に立って説かれていますので、仏(先生)には、この内容が分かっている、凡夫(生徒)は、いきなり十如是を説かれても、夢を見ている様で分かりません。それで、次の所、「世雄偈せおげ Seoge」の部分へ入って、凡夫(生徒)の立場に立って分かる様に具体的に噛んで含んで教えが説かれるのであります。

爾時世尊(にーじーせーそん ni- ji- se- son)。

欲重宣此義(よくじゅーせんしぎ yoku ju- sen shi gi)。

而説偈言(にーせつげーごん ni- setsu ge- gon)。

その時に世尊(釈尊)は、

重ねて、この法華經の意味を宣べようと考え、

偈(同じ文字数で表現する詩の様な文章形態)を説いて言うには、

世雄不可量(せーおーふーかーりょー se- o- fu- ka- ryo-)。

諸天及世人(しよーてんぎゅーせーにん sho- ten gyu- se- nin)。

一切衆生類(いっさいしゅーじょーるい i^sai shu- jo- rui)。

無能知佛者(むーのーちーぶッしゃー mu- no- chi- bu^sha-)。

(仏は世間において第一の雄者なれば別名世雄と言う) 凡夫には世雄(仏)の智慧を量ることが出来ません。

天上の諸天でさえも、

一切衆生の類も、

誰も知る事が出来ません。

佛力無所畏(ぶッりきむーしょーいー bu^riki mu- sho- i-)。

解脱諸三昧(げーだッしょーさんまい ge- da^sho- san mai)。

及佛諸餘法(ぎゅーぶッしょーよーほー gyu- bu^sho- yo- ho-)。

無能測量者(むーのーしきりょーしゃー mu- no- shiki ryo- sha-)。

仏の智慧の力には他の力に対して畏れる所が一切有りません。

心を妙法蓮華經の法を悟った境地に定めて揺るがぬ、

仏の説く諸々の法を、

能く知り量る者は今迄いませんでした。

本從無教佛(ほんじゅーむーしゅーぶつ hon ju- mu- shu- butsu)。

具足行諸道(ぐーそくぎょーしょーどー gu- soku gyo- sho- do-)。

仏は過去世から数え切れない仏に仕えて、

沢山の修行をして来ました。

甚深微妙法(じんじんみーみょーほー jin jin mi- myo- ho-)。

難見難可了(なんけんなんかーりょー nan ken nan ka- ryo-)。

その法は甚深にして凡夫が知る事は難しく、

理解する事が難い。

於無量億劫(おーむーりょーおッこー o- mu- ryo- o^ko-)。

行此諸道已(ぎょーしーしょーどーいー gyo- shi- sho- do- i-)。

道場得成果(どーじょーとくじょーかー do- jo- toku jo- ka-)。

我已悉知見(がーいーしッちーけん ga- i- shi^chi- ken)。

仏は無量億劫という長い間、

修行し終わって

伽耶始成の道場に於いて成仏し、

我(仏)すでに悉く全ての事を知り見る事が出来る様になりました。

如是大果報(にょーぜーだいかーほー nyo- ze- dai ka- ho-)。

種種性相義(しゅーじゅーしょーそーぎー shu- ju- sho- so- gi-)。

我及十方佛(がーぎゅーじっぽーぶつ ga- gyu- ji^po- butsu)。

乃能知是事(ないのーちーぜーじー nai no- chi- ze- ji-)。

是の如き大果報

十如是、諸法実相の意味内容は、
我（釈尊）及び十方の仏が、
よく知っている事であります。

是法不可示(ぜーほーふーかーじー ze- ho- fu- ka- ji-)。
言辭相寂滅(ごんじーそーじゃくめつ gon ji- so- jyaku metsu)。
この法は姿形に示す事が出来ません。
言辭に示す事も出来ません。

諸餘衆生類(しよーよーしゆーじょーるい sho- yo- shu- jo- rui)。
無有能得解(むーうーのーとくげー mu- u- no- toku ge-)。
沢山の人の中で、
この法は能く理解されることが出来ません。

除諸菩薩衆(じょーしよーぼーさつしゆー jo- sho- bo- sa^shu-)。
信力堅固者(しんりきけんごーしゃー shin riki ken go- sha-)。
諸佛弟子衆(しよーぶつでーしーしゆー sho- butsu de- shi- shu-)。
會供養諸佛(ぞーくーよーしよーぶつ zo- ku- yo- sho- butsu)。
菩薩衆を除き、
信力の強い者は除き（信力の強い者は、諸法実相を理解する事が出来ます）
沢山の仏の弟子（声聞衆）達が、
かつて過去世に、沢山の諸仏を供養し修行し、

一切漏已盡(いっさいろーいーじん i^sai ro- i- jin)。
住是最後身(じゅーぜーさいごーしん ju- ze- sai go- shin)。
如是諸人等(にょーぜーしよーにんとー nyo- ze- sho- nin to-)。
其力所不堪(ごーりきしよーふーかん go- riki sho- fu- kan)。
一切の迷い（漏れ）を断じ、
人間界に住むのはこれが最後で、成仏して涅槃に入るという位にある人
そういう人達が集まって、
阿羅漢（小乗経の悟りを得た修行者）の知恵をもってしても仏の知恵を理解する事は出来
ませんでした。

假使満世間(けーしーまんせーけん ke- shi- man se- ken)。
皆如舍利弗(かいにょーしゃりほつ kai nyo- Sharihotsu)。
盡思共度量(じんしーぐーたくりょー jin shi- gu- taku ryo-)。
不能測佛智(ふーのーしきぶっちー fu- no- shiki bu^chi-)。
たとえ世間に住む、知恵者が全て集まったとしても、
皆が舍利弗の様な知恵者だったとしても、
思いを盡し一所懸命考えても、

仏が悟った知恵を測る事は出来ません。

正使満十方(しよーしーまんじっぽー sho- shi- man ji^po-)。

皆如舍利弗(かいにょーしゃりほつ kai nyo- sharihotsu)。

及餘諸弟子(ぎゅーよーしよーでーしー gyu- yo- sho- de- si-)。

亦満十方刹(やくまんじっぽーせつ yaku man ji^po- setsu)。

盡思共度量(じんしーぐーたくりょー jin shi- gu- taku ryou)。

亦復不能知(やくぶーふーのーちー yaku bu- fu- no- chi-)。

舍利弗のような者が十方の国土に満ちる程集まっても

皆が舍利弗のような知恵者だとしても

知恵者以外の諸々の弟子の全てが、

亦、十方の国土に満たされても、

思いを盡し共に一所懸命考えたとしても、

ほんの少しでも、またまた知る事が出来ません。

辟支佛利智(ひやくしーぶつりーちー hyaku shi- bu^ri- chi-)。

無漏最後身(むーろーさいごーしん mu- ro- sai go- shin)。

亦満十方界(やくまんじっぽーかい yaku man ji^po- kai)。

其數如竹林(ごーしゅーにょーちくりん go- shu- nyo- chiku rin)。

声聞よりも上の縁覚の利智を持った辟支佛が、

迷いを断じ盡して、まったく漏れなく生死に苦しむことを最後として、

亦十方世界に充滿し、

その数が世の中の竹林のように数え切れないほど集まって、

斯等共一心(しーとーくーいっしん Shi- to- ku- i^shin)。

於億無量劫(おーおくむーりょーこー o- oku mu- ryo- ko-)。

欲思佛實智(よくしーぶつじっちー yoku shi- butu ji^chi-)。

莫能知少分(まくのーちーしよーぶん maku no- chi-sho- bun)。

その心を共に一心にして、

量り知れない程の時間をかけ、

仏の悟った法を知りたいと欲しても、

ほんの少しでも知り悟る事が出来ません。

新発意菩薩(しんぼっちーぼーさつ shin bo^chi-bo-satsu)。

供養無數佛(くーよーむーしゅーぶつ ku- yo- mu- shu- butsu)。

了達諸義趣(りょーだっしよーぎーしゅー ryo- da^sho- gi- shu-)。

又能善說法(うーのーぜんせっぽー u- no- zen se^po-)。

新しく道心を起こした菩薩が、

数え切れない多くの仏を供養し、

沢山の法の道理に到達して、

又、その法の道理を能く人々の為に説法する。

如稲麻竹葦(にょどーまーちくいー nyo- do- ma- chiku i-)。

充滿十方利(じゅーまんじっぽーせつ ju- man ji^po- setsu)。

一心以妙智(いっしんいーみよーちー i^shin i- myo- chi-)。

於恒河沙劫(おーごーがーしゃーこー o- go- ga- sha- ko-)。

咸皆共思量(げんかいぐーしーりよー gen kai gu- shi- ryo-)。

不能知佛智(ふーのーちーぶっちー fu- no- chi- bu^chi-)。

これらの菩薩が稲の様に麻の様に竹の様に葦の様に、(世の中に当たり前の様にありふれた物のように)

十方の国に充滿して、

一心にその智慧を持って、

ガンジス河の砂の数ほど長い時間をかけて、

皆で力を合わせて一所懸命考えても、

仏の智慧を知る事は出来ません。

不退諸菩薩(ふーたいしよーぼーさつ fu- tai sho- bo- satsu)。

其數如恒沙(ごーしゅーにょーごーじゃー go- shu- nyo- go- ja-)。

一心共思求(いっしんぐーしーぐー i^shin gu- shi- gu-)。

亦復不能知(やくぶーふーのーちー yaku bu- fu- no- chi-)。

修行を積み成仏の位にあつて、退転しない決意の諸菩薩。

その数がガンジス河の砂の数より多くいて、

それらが心をつにして共に思い求めても、

亦復、能く知る事が出来ません。

又告舍利弗(うーごーしゃりほつ u- go- sharihotsu)。

無漏不思議(むーろーふーしーぎー mu- ro- fu- shi- gi-)。

甚深微妙法(じんじんみーみよーほー jin jin mi- myo- ho-)。

我今已具得(がーこんいーぐーとく ga- kon i- gu- toku)。

仏が又、舍利弗に告げて申されるには、

漏れる事の無い(迷いの無い) 不思議の法、

甚だ深い不可思議な妙法蓮華經の法を

私(釈尊)は今已にわが心に具わり得たのであります。

唯我知是相(ゆいがーちーぜーそー yui ga- chi- ze- so-)。

十方佛亦然(じっぽーぶつやくねん ji^po- butsu yaku nen)。

舍利弗當知(しゃりほつとーちー shariho^to- chi-)。

諸佛語無異(しよーぶつごーむーいー syo- butsu go- mu- i-)。

於佛所説法(おーぶっしよーせつぽー o- bu^sho- se^po-)。

當生大信力(とーしよーだいしんりき to- sho- dai shin riki)。

ただ私だけが、この諸法の実相を知り、
十方世界の仏も亦たしかに知っている事なのです。
舍利弗よ、まさにこの事を知りなさい。
一切の諸佛の言葉の真実に一つとして異なりは有りません。
仏の説法に縁して、
まさに大信力を生じなさい。

世尊法久後(せーそんほーくーごー se- son ho- ku- go-)。
要當説眞実(よーとーせッしんじつ yo- to- se[^]shin jitsu)。
仏は法を説き始めてより久しく、最後に来て、
當に一番の要、眞実の妙法蓮華經の法を説くのであります。

告諸聲聞衆(ごーしょーしょーもんじゅー go- sho-sho- mon ju-)。
及求縁覺乘(ぎゅーぐーえんがくじょー gyu- gu- en gaku jo-)。
我令脱苦縛(がーりょーだッくーばく ga- ryo- da[^]ku- baku)。
速得涅槃者(だいとくねーはんしゃー dai toku ne- han sha-)。
諸々の声聞衆に告げ、
及び縁覺の人々を求め、
菩薩自身が六度(布施・持戒・忍辱・精進・智恵・禪定)の修行をもって、六道の苦しみ、
縛りから解脱し、
後に涅槃を得させる為に、

佛以方便力(ぶッちーほーべんりき bu[^]chi- ho- ben riki)。
示以三乗教(じーいーさんじょーきょー ji- i- san jo- kyo-)。
衆生處處著(しゅーじょーしょーしょーぢやく shu- jo- sho- sho- jaku)。
引之令得出(いんしーりょーとくしゅつ in shi- ryo- toku shutsu)。
仏は方便の権智をもって、
声聞・縁覺・菩薩の三乗の教えを以って示し、
衆生の三界(欲界・色界・無色界)の處に執着する心を、
その苦から引き上げ、得脱、出離せしめようとしたのであります。

爾時大衆中(にーじーだいしゅーちゅー ni- ji- dai shu- chu-)。
有諸聲聞(うーしょーしょーもん u- sho- sho- mon)。
漏盡阿羅漢(ろーじんあーらーかん ro- jin a- ra- kan)。
阿若橋陳如等(あーにゃーきょーじんによーとー a- nya- kyo- jin nyo- to-)。
その時に大衆の中に、
諸々の声聞有り、
漏盡(迷いを断尽した)の阿羅漢、
釈尊の一番最初の弟子になった阿若橋陳如等の弟子をはじめとして、

千二百人(せんに一ひやくにん sen ni- hyaku nin)。
及發聲聞(ぎゅーほっしょーもん gyu- ho^sho- mon)。
僻支佛心(ひやくしーぶっしん hyaku shi- bu^shin)。
千二百人の修行者、
及び声聞、
辟支佛(一人で悟りを開ける)の心を起こせる、

比丘(びく bi ku)。
比丘尼(びくにー bi ku ni-)。
優婆塞(うーばーそく u- ba- soku)。
優婆夷(うーばーいー u- ba- i-)。
男の出家者
女の出家者
男の信者
女の信者

各作是念(かくさーぜーねん kaku sa- ze- nen)。
今者世尊(こんしゃーせーそん kon sha- se- son)。
何故慇懃(がーこーおんごん ga- ko- on gon)。
稱歎方便(しょーたんほーべん sho- tan ho- ben)。
而作是言(にーさーぜーごん ni- sa- ze- gon)。
各々この疑念を抱く、
今、世尊は、
何故、懇ろに、
方便の法をほめる
この言葉を出すのか、

佛所得法(ぶっしょーとくほー bu^sho- toku ho-)。
甚深難解(じんじんなんげー jin jin nan ge-)。
有所言説(うーしょーごんぜつ u- sho- gon zetsu)。
意趣難知(いーしゅーなんちー i- shu- nan chi-)。
仏の得た法は、
甚だ深く理解しにくく、
説法される所の言葉の、
その意と趣は知り難し、

一切聲聞(いっさいしょーもん i^sai sho- mon)。
僻支佛(ひやくしーぶつ hyaku shi- butsu)。
所不能及(しょーふーのーぎゅー sho- fu- no- gyu-)。
一切の声聞、

辟支佛では、
到達する事の出来ない所であります。

佛説一解脱義(ぶッせついちげーだつぎー bu^setsu ichi ge- datsu gi-)。

我等亦得此法(がーとーやくとくしーほー ga-to- yaku toku si- ho-)。

到於涅槃(とーおーねーはん to- o- ne- han)。

仏は唯一つの解脱(成仏)の義を説きました。

我等も亦、この法を得て

涅槃(成仏)に到達したい。

而今不知(にーこんふーちー ni- kon fu- chi-)。

是義所趣(ぜーぎーしゅーしゅー ze- gi- sho- shu-)。

しかるに今、仏は三乗(声聞・縁覚・菩薩)に説いた教えは方便で真実では無いという言葉
業を衆生に示しましたが、衆生はその事を理解する事が出来ませんでした。

爾時舍利弗(にーじーしゃりほつ ni- ji- shaihotsu)。

知四衆心疑(ちーしーしゅーしんぎー chi- shi- shu- shin gi-)。

自亦未了(じーやくみーりょー ji- yaku mi- ryo-)。

而白佛言(にーびやくぶつごん ni- byaku butsu gon)。

その時、舍利弗は、

四衆(比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷)の人々の疑いの心を知って、

舍利弗自身も分からないので、

仏に向かって代表して申し上げました。

世尊(せーそん se- son)。

何因何縁(がーいんがーえん ga- in ga- en)。

慇懃稱歎(おんごんしゅーたん on gon sho- tan)。

諸佛第一方便(しゅーぶつだいいちほーべん sho- butsu dai ichi ho- ben)。

甚深微妙(じんじんみーみょー jin jin mi- myo-)。

難解之法(なんげーしーほー nan ge- shi- ho-)。

仏様、

どういう原因と、どういう縁があつて

ねんごろに、この法華経をほめたたえ、

諸仏の第一(最高)の方便として、

甚だ深く微妙(不思議)な、

理解しにくい、この妙法をほめたたえたいのですか。

我自昔来(がーじーしゃくらい ga- ji- shaku rai)。

未曾従佛(みーぞーじゅーぶつ mi- zo- ju- butsu)。

聞如是説(もんによーぜーせつ mon nyo- ze- setsu)。

私は昔から今日まで、
未だかつて仏より、
この様な説法を聞いたことはありません。

今者四衆(こんしゃーしーしゅー kon sha- shi- shu-)。
咸皆有疑(げんかいうーぎー gen kai u- gi-)。
唯願世尊(ゆいがんせーそん yui gan se- son)。
敷演斯事(ふーえんしーじー fu- en shi- ji-)。
今ここにいる人達は、
皆んな疑問を持ちました。
ただ願わくば仏様よ、
この事を分かりやすく説いて下さい。

世尊何故(せーそんがーこー se- son ga- ko-)。
慇懃稱歎(おんごんしょーたん on gon sho- tan)。
甚深微妙(じんじんみーみょー jin jin mi- myo-)。
難解之法(なんげーしーほー nan ge- shi- ho-)。
仏様、なぜ
ねんごろに法華経をほめたたえ、
甚だ深く、微妙で、
むつかしい法華経を大切にするのはですか。

爾時舍利弗(にーじーしゃりほつ ni- ji- shaihotsu)。
欲重宣此義(よくじゅーせんしぎ yoku ju- sen shi gi)。
而説偈言(にーせつげーごん ni-setsu ge- gon)。
その時舍利弗は、
かさねてこの事を述べようとして、
偈を説いて申し上げた。

慧日大聖尊(えーにちだいしょーそん e- nichu dai sho- son)。
久乃説是法(くーないせつぜーほー ku- nai setsu ze- ho-)。
仏様よ、
あなたが説法されるようになってから久しいのに、今初めて法華経という教え聞ききました。

自説得如是(じーせつとくによーぜー ji- se^toku nyo- ze-)。
力無畏三昧(りきむーいーさんまい riki mu- i- san mai)。
禪定解脱等(ぜんじょーげーだつとー zen jo- ge- da^to-)。
不可思議法(ふーかーしーぎーほー fu- ka- shi- gi- ho-)。
私は今迄の様に他人の為ではなく、ここからは自分の説きたい教えとして、

なにもものも恐れね悟りの力と、
禅定、解脱によって、
不可思議の法を、得たと説きました。

道場所得法(どーじょーしょーとくほー do- jo- sho- toku ho-)。
無能發問者(むーのーほつもんしゃー mu- no- hotsu mon sha-)。
我意難可測(がーいーなんかーしき ga- i- nan ka- shiki)。
亦無能問者(やくむーのーもんしゃー yaku mu- no- mon sha-)。
修行の道場で得た、この妙法蓮華經の法は、
誰も理解出来ない為、誰も能く質問する者が無く、
私(舍利弗)も、この法に対して推測することが難しく、
故に、能く問う事が出来ませんでした。

無問而自説(むーもんじーせつ mu- mon ni- ji- setsu)。
稱歎所行道(しょーたんしょーぎょーどー syo- tan sho- gyo- do-)。
智慧甚微妙(ちーえーじんみーみょー chi- e- jin mi- myo-)。
諸佛之所得(しょーぶっしーしょーとく sho- bu^shi- syo- toku)。
誰も質問出来ない為に、仏はどんどん説いて行って、
自分で説いた事を自分で賞賛して、
その智慧は微妙で甚だ微妙で想像する事さえ出来ません。
諸々の仏が得られた成仏の境涯というのは、どういふものなのでしょう。

無漏諸羅漢(むーろーしょーらーかん mu- ro- sho- ra- kan)。
及求涅槃者(ぎゅーぐーねーはんしゃー gyu- gu- ne- han sha-)。
今皆墮疑網(こんかいだーぎーもー kon kai da- gi- mo-)。
佛何故説是(ぶつがーこーせつぜー butsu ga- ko- setsu ze-)。
煩惱を断じ尽して、漏れる事が無くなった小乗の羅漢(覺者)や、
灰身滅智(悪心、迷心を断尽する為に死んで灰になれば悪心、迷心、智慧を無くして仏に
成れるとの考え方)の涅槃を求める者達は、
今になって、皆仏が、この様に説き出した法華經に疑いを持ち、疑いの網にからまってし
まいました。
仏は何故この法華經を説くのですか。

其求縁覚者(ごーぐーえんがくしゃー go- gu- en gaku sha-)。
比丘比丘尼(びくびくにー biku bikuni-)。
諸天龍鬼神(しょーてんりゅーきーじん sho- ten ryu- ki- jin)。
及乾闥婆等(ぎっけんだつばーとー gi^ken datsu ba- to-)。
その縁覚を求める者、
男の出家者、女の出家者も、
諸々の天竜、鬼神も、

及び、乾闥婆（香神・天界の樂神で、酒肉を食わず香を求め身から香を出す）

相視懷猶豫（そーじーえーゆーよー so- ji- e- yu- yo-）。

瞻仰両足尊（せんごーりょーぞくそん sen go- ryo- zoku son）。

是事為云何（ぜーじーいーうんがー ze- ji- i- un ga-）。

願佛為解説（がんぶつーいげーせつ gan butsu i- ge- setsu）。

御互いに見合って猶予（間）を抱き、

仏の尊い両足を仰ぎ見て、息を飲んだ状態になって。

これは、何故なのでしょう。

願わくば仏様、衆生の為に解説して下さい。

於諸聲聞衆（おーしょーしょーもんじゅー o- sho- sho- mon ju-）。

佛説我第一（ぶっせつがーだいいち bu^setsu ga- dai ichi）。

我今自於智（がーこんじーおーちー ga- kon ji- o- chi-）。

疑惑不能了（ぎーわくふーのーりょー gi- waku fu- no- ryo-）。

声聞の衆生の中において、

仏は、私（舍利弗）の智恵が一番だと説いてくれました。

その私自信が自分の知恵をもって考えても、

疑いが深くなり、悟る事が出来ません。

為是究竟法（いーぜーくーきょーほー i- ze- ku- kyo- ho-）。

為是所行道（いーぜーしょーぎょーどー i- ze- sho- gyo- do-）。

この法華經こそが究極の法なのですか。ならば私が三乗の法で悟ったと思ったのは何だったのでしょうか。

それとも、この法華經も、修行の一つを説いているに過ぎないのでしょうか。

佛口所生子（ぶっくーしょーしょーしー bu^ku- sho- sho- shi-）。

合掌瞻仰待（がっしょーせんごーだい ga^sho- sen go- dai）。

願出微妙音（がんすいみーみょーおん gan sui mi- myo- on）。

時為如實説（じーいーによーじっせつ ji- i- nyo- ji^setsu）。

仏の説法を今迄聞いて来た仏の子供は、

掌を合わせ、仏を仰ぎ見て、待っています。

どうか、理解出来る様に微妙な、やさしい声で、

今、我々衆生の為に、真実を説いて下さい。

諸天龍神等（しょーてんりゅーじんとー sho- ten ryu- jin to-）。

其数如恒沙（ごーしゅーによーごーじゃー go- shu- nyo- go- ja-）。

求佛諸菩薩（ぐーぶっしょーぼーさつ gu- bu^sho- bo- satsu）。

大数有八萬（だいしゅーうーはちまん dai shu- u- hachi man）。

又諸萬億國（うーしょーまんのっこく u- sho- man no^koku）。

諸々の天龍神等、
その数はガンジス河の砂の数ほどの人数であり、
仏道を求める菩薩達は、
その大きな数、八萬人にも及び、
又、萬億の国に渡ります。

轉輪聖王至(てんりんじょーおーしー ten rin jo- o- shi-)。

合掌以敬心(がっしょーいーきょーしん ga^sho- i- kyo- shin)。

欲聞具足道(よくもんぐーそくどー yoku mon gu- soku do-)。

轉輪聖王(武力を用いなくて正法をもって全世界を統治するとされる理想の王)もやってまいりました。

合掌し、仏を敬う心を持って、

最高で完全な、この法華經の教えを聞く事を欲しています。

爾時佛告(にーじーぶつごー ni- ji- butsu go-)。

舍利弗(しゃりほつ sharihotsu)。

止。止。(しーしー shi- shi-)。

不須復説(ふーしゅーぶーせつ fu- shu- bu- setsu)。

その時、仏は舍利弗に告げた、

止めなさい。止めなさい。

この法華經を再び説く事はしません。

若説是事(にやくせつぜーじー nyaku setsu ze- ji-)。

一切世間(いっさいせーけん i^sai se- ken)。

諸天及人(しょーてんぎゅーにん sho- ten gyu- nin)。

何故ならば、若し、再び説けば、

一切の世間と、

諸天、及び衆生、

皆當驚疑舍利弗(かいとーきょーぎーしゃりほつ kai to- kyo- gi- sharihotsu)。

重白佛言(じゅーびやくぶつごん ju- byaku butsu gon)。

皆、驚きと疑いを生じるでしょう。

舍利弗は、仏に対して重ねて申し上げます。

世尊(せーそん se- son)。

唯願説之(ゆいがんせっしー yui gan se^shi-)。

唯願説之(ゆいがんせっしー yui gan se^shi-)。

仏様、

ただ願わくば法華經を説いて下さい。

法華經を説いて下さい。

所以者何(しょーいーしゃーがー sho- i- sha- ga-)。

ゆえんはいかん、(なぜならば)

是會無数(ぜーえーむーしゅー ze- e- mu- shu-)。

百千萬億(ひゃくせんまんのく hyaku sen man noku)。

阿僧祇衆生(あーそーぎーしゅーじょー a- so- gi- shu- jo-)。

この法華經の会座に集う、数え切れない百千萬億阿僧祇の衆生は、

會見諸佛(ぞーけんしょーぶつ zo- ken sho- butsu)。

諸根猛利(しょーこんみょーりー sho- kon myo- ri-)。

知慧明了(ちーえーみょーりょー chi- e- myo- ryo-)。

かって仏を見奉り、

法を求める諸々の機根は元気で利発で、

智慧は聡明ではっきりしている。

聞佛所説(もんぶッしょーせつ mon bu^sho- setsu)。

則能敬信(そくのーきょーしん soku no- kyo- shin)。

仏の説法を聞けば、

すなわち能く敬い素直に信じるでしょう。

爾時舍利弗(にーじーしゃりほつ ni- ji- sharihotsu)。

欲重宣此義(よくじゅーせんしぎ yoku ju- sen shigi)。

而説偈言(にーせつげーごん ni- setsu ge- gon)。

その時舍利弗は、

重ねてこの義を述べようと欲して、

偈を説いて言うには、

法王無上尊(ほーおーむーじょーそん ho- o- mu- jo- son)。

唯説願勿慮(ゆいせつがんもッりょー yui setsu gan mo^ryo-)。

是會無量衆(ぜーえーむーりょーしゅー ze- e- mu- ryo- shu-)。

有能敬信者(うーのーきょーしんしゃー u- no- kyo- shin sha-)。

仏法の王様である仏よ、

ただ何の心配なく、法華經を説いて下さい。

ここに集まった数え切れない人達は、

必ず仏の説く法を敬い信ずる者達です。

佛復止舍利弗(ぶつぶーしーしゃりほつ butsu bu- shi- sharihotsu)。

若説是事(にゃくせつぜーじー nyaku setsu ze- ji-)。

一切世間(いっさいせーけん i^sai se-ken)。

天人阿修羅(てんにんあーしゅーらー ten nin a- shu- ra-)。

皆當驚疑(かいとーきょーぎー kai to- kyo- gi-)。

仏はまた、その舍利弗の言葉を止めて、

若し、私が、この法華經を説くならば、

一切世間の、

天、人、阿修羅、

皆、まさに驚き、疑い、

増上慢比丘(ぞーじょーまんびーくー zo- jo- man bi- ku-)。

將墜於大抗(しゅーづいおーだいきょー sho- zui o- dai kyo-)。

増上慢の比丘は、

まさに、大きな穴(無間地獄)に墮ちるであろう。

爾時世尊(にーじーせーそん ni- ji- se- son)。

重説偈言(じゅーせつげーごん ju- setsu ge- gon)。

止止不須説(しーしーふーしゅーせつ shi- shi- fu- shu- setsu)。

その時に世尊が、

重ねて偈を説いて言う事に対して、

止めなさい。止めなさい。この法華經を事細かに説く事は出来ない。

我法妙難思(がーほーみょーなんしー ga- ho- myo- nan shi-)。

諸増上慢者(しゅーぞーじょーまんしゃー sho- zo- jo- man sha-)。

聞必不敬信(もんびつふーきょーしん mon pitsu fu- kyo- shin)。

私が説いた妙法は不思議で、理解し難い法で、

諸々の慢心を持っている者が、

この妙法を聞けば、必ず敬い信ずる事が出来なくなります。

爾時舍利弗(にーじーしゃりほつ ni- ji- sharihotsu)。

重白佛言(じゅーびやくぶつごん ju- byaku butsu gon)。

その時、舍利弗は、

三度目、重ねて仏に言うには、

世尊(せーそん se- son)。

唯願説之(ゆいがんせっしー yui gan se^shi-)。

唯願説之(ゆいがんせっしー yui gan ses^shi-)。

仏様、ただ願わくば、この妙法を説いて下さい。この妙法を説いて下さい。

今此會中(こんしーえーちゅー kon shi- e- chu-)。

如我等比(にょーがーとーびー nyo- ga- to- bi-)。

百千萬億(ひゃくせんまんのく hyaku sen man noku)。

今ここに集まっている者達は、
私（舎利弗）と等しい者達が、
百千萬億もいます。

世世已會（せーせーいーぞー se- se- i- zo-）。
従佛受化（じゅーぶつじゅーけー ju- butsu ju- ke-）。
如此人等（にょーしーにんとー nyo- shi- nin to-）。
必能敬信（ひつの一きょーしん hitsu no- kyo- shin）。
大昔から、縁が有りすでに仏に会い、仏に仕え、
その教化を受けているのです。
そういう人達ですから、
必ず能く仏を敬い信じます。

長夜安穩（ちよーやーあんのん jo- ya- an non）。
多所饒益（たーしよーにょーやく ta- sho- nyo- yaku）。
そうすれば、長い夜の暗闇のような苦しみの人生が安穩になり、
多くの所に利益を受ける事が出来るようになるでしょう。

爾時舎利弗（にーじーしゃりほつ ni- ji- sharihotsu）。
欲重宣此義（よくじゅーせんしぎ yoku ju- sen shi gi）。
而説偈言（にーせつげーごん ni- setsu ge- gon）。
その時舎利弗は、
重ねてこの義を宣べんと欲して、
偈文を説いて仏に申し上げました。

無上両足尊（むーじょーりょーぞくそん mu- jo- ryo- zoku son）。
願説第一法（がんせつだいいッぽー gan setsu dai i^pou）。
我為佛長子（がーいーぶツちよーしー ga- i- bu^cho- shi-）。
唯垂分別説（ゆいすいふんべつせつ yui sui fun be^setsu）。
この上ない仏様（両足で立っている生物の中で最も尊い）
御願いです。真実、最上の第一の法を説いて下さい。
私は仏の弟子の中でも長子として、智慧第一と誉めて頂いていますから、
ただ細かく分けて、詳しく説いて下さい。

是會無量衆（ぜーえーむーりょーしゅー ze- e- mu- ryo- shu-）。
能敬信此法（の一きょーしんしーほー no- kyo- shin shi- ho-）。
佛已會世世（ぶツちーぞーせーせー bu^chi- zo- se- se-）。
教化如是等（きょーけーにょーぜーとー kyo- ke- nyo- ze- to-）。
ここに集まった数え切れない沢山の人々は、
能くその真実の妙法蓮華經の法を信ずる事が出来ます。

仏はすでに昔の世に、
ここにいる人々を教化されたことがあります。

皆一心合掌(かいいっしんがっしょー kai i[^]shin ga[^]sho-)。
欲聴受佛語(よくちよーじゅーぶつごー yoku cho- ju- butsu go-)。
ここにいる皆は、一心に手を合わせ、
仏の言葉を良く聞く事を欲しています。

我等千二百(がーとーせんに一ひやく ga- to- sen ni- hyaku)。
及餘求佛者(ぎゅーよーぐーぶっしゃー gyu- yo- gu- bu[^]sha-)。
願為此衆故(がんにーしーしゅーこー gan ni- shi- shu- ko-)。
唯垂分別説(ゆいすいふんべっせつ yui sui fun be[^]setsu)。
私達千二百人と、
その他の仏道を求める者達がここにいます。
願わくばこれらの人々の為に、
ただこまかに、くわしく説いて下さい。

是等聞此法(ぜーとーもんしーほー ze- to- mon shi- ho-)。
則生大歡喜(そくしょーだいかんぎー soku sho- dai kan gi-)。
これらの人々は、この妙法蓮華經の法を聞いたならば、
大歡喜を生ずるでしょう。

爾時世尊(にーじーせーそん ni- ji- se- son)。
告舍利弗(ごーしゃりほつ go- sharihotu)。
汝已慇懃三請(によーいーおんごんさんしょー nyo- i- on gon san sho-)。
その時に世尊は、
舍利弗に告げて言うには、
あなた方は、すでに丁寧に三度も法を説いて下さいと、私に願いました。

※三止四請(さんしししょう) 仏が妙法蓮華經の法を説く事を三回止め、舍利弗が四回妙法蓮華經の法を説くことを請求し、四回目に仏は聞き届け説き始める。仏が衆生に説くという仏主体から、自分達の成仏の為に、どうしても説いて貰わなければいけないという衆生主体に切り替わる。

豈得不説(きーとくふーせつ ki- toku fu- setsu)。
汝今諦聽(によーこんたいちよー nyo- kon tai cho-)。
善思念之(ぜんしーねんしー zen shi- nen shi-)。
ならば私も説かない訳にはいきません。
汝等、今あきらかに聴き、
良く、この法を心に深くとどめなさい。

吾當為汝(ごーとーいーによー go- to- i- nyo-)。
分別解説(ふんべつげーせつ fun betsu ge- setsu)。
私はまさに汝等の為に、
この法を分別して解説します。

説此語時(せっしーごーじー se^shi- go- ji-)。
會中有(えーちゅーうー e- chu- u-)。
比丘(びく bi ku)。
比丘尼(びくにー bi ku ni-)。
優婆塞(うーばーそく u- ba- soku)。
優婆夷(うーばーいー u- ba- i-)。
五千人等(ごーせんにとー go- sen nin to-)。
この言葉を説く時、
ここに集まっている、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の五千人の人々。

※五千人の増上慢の人々は、四十年余り、釈尊の説法を聞いて来て、釈尊の法は、こういうもので、釈尊の事は釈尊よりも理解し仏法の全てをマスターしていると思いついていた為に、今迄の教えと、全く違う教えを、これから説くと釈尊が言い出した時、じゃあ今まで自分達が聞いて来た法、やって来た修行は何だったんだと怒って席を蹴るのであります。

即從座起(そくじゅーざーきー soku ju- za- ki-)。
禮佛而退(らいぶつにーたい rai butsu ni- tai)。
即座に立ち上がり、
仏に合掌して退場しました。

所以者何(しょーいーしゃーがー sho- i- sha- ga-)。
此輩罪根深重(しーはいざいこんじんじゅー shi- hai zai kon jin ju-)。
及増上慢(ぎゅーぞーじょーまん gyu- zo- jo- man)。
何故ならば、
これ等の輩は、罪障の根が深く重く、
及び増上慢で、

未得謂得(みーとくいーとく mi- toku i- toku)。
未證謂證(みーしょーいーしょー mi- sho- i- sho-)。
有如此失(うーによーしーしつ u- nyo- shi- shitsu)。
是以不住(ぜーいーふーじゅー ze- i- fu- ju-)。
未だ得ざるを得たると言い、
未だ成仏の境界を得ていないのに、得ていると思いつき、
このような欠点がある為に、

この説法の場合にいるという事が出来ない。

世尊默然(せーそんもくねん se- son moku nen)。

而不制止(にーふーせいしー ni- fu- sei shi-)。

仏は去る人を引き留める言葉も無く黙っていた。

※自分の考えを最上最高と思ひ込み尋ね求める事も無く自ら妙法蓮華經の法の縁を断ち切る者を、どれだけ説得しても無駄だから、釈尊は引き留めない。

この五千人の増上慢の人々が立ち去ってからが、法華經の本題になります。

爾時佛告(にーじーぶつごー ni- ji- butsu go-)。

舍利弗(しゃりほつ sharihotsu)。

仏は、その時舍利弗に告げ、

我今此衆(がーこんしーしゅー ga- kon shi- shu-)。

無復枝葉(むーぶーしーよー mu- bu- shi- yo-)。

純有貞實(じゅんぬーじょーじつ jun nu- jo- jitsu)。

舍利弗(しゃりほつ sharihotsu)。

如是増上慢人(にょーぜーぞーじょーまんにん nyo- ze- zo- jo- man nin)。

退亦佳矣(たいやっけーいー tai ya^ke- i-)。

私のもとに残った、これ等の衆生は、

二股の枝葉の様な二心無く、

純粹に正しいまことの人々である、舍利弗よ、

このような増上慢の人々が、

退いて行くのも良いでしょう。

汝今善聽(にょーこんぜんちよー nyo- kon zen cho-)。

當為汝説(とーいーにょーせつ to- i- nyo- setsu)。

汝、今、よく聞きなさい。

まさにここに残った汝らの為にこそ、真実の法を説きましょう。

舍利弗言(しゃりほつごん sharihotsu gon)。

唯然(いーねん i- nen)。

世尊(せーそん se-son)。

願樂欲聞(がんぎょーよくもん gan gyo- yoku mon)。

舍利弗の言うには、

ただ仏の言う通りです。

願わくば私達が仏に三度求めた様に聞きたいと思います。

佛告舍利弗(ぶつごーしゃりほつ butsu go- sharihotsu)。

如是妙法(にょぜーみよーほー nyo- ze- myo- ho-)。

諸佛如来(しょぶつにょらい sho- butsu nyo- rai)。

時乃説之(じないせっしー ji- nai se^shi-)。

佛は舍利弗に告げ、

かくのごとき妙法がここに、こうして説かれるという事は、

全ての仏が、

説くべき時が来て、ここに来て説かれるようになったのです。

如優曇鉢華(にょーうどんぼっけー nyo- u- don ba^ke-)。

時一現耳(じいちげんにー ji- ichi gen ni-)。

三千年に一度咲くという優曇華が、

いっぺんに、この世に咲き誇ったようなものです。

舍利弗(しゃりほつ sharihotsu)。

汝等當信佛之所説(にょーとーとーしんぶっしーしょーせつ nyo- to- to- shin bu^shi- sho- setsu)。

言不虛妄(ごんふーこーもー gon fu- ko- mo-)。

舍利弗よ、

汝等はまさに仏の説く所を信じなさい。

仏の言葉に一言も虚言、妄語はありません。

舍利弗(しゃりほつ sharihotsu)。

諸佛隨宜説法(しょぶつずいぎせつぽー sho- butsu zui gi- se^po-)。

意趣難解(いしゅーなんげー i- shu- nan ge-)。

舍利弗よ、諸佛の説く法は、ほどよく、その時の状態にしたがって、

心の趣くまま説く法は衆生には理解し難い。

※今迄は衆生の機根に合わせる法を説いて来たが、これからは衆生に仏の境涯に合わせて貰う様に、仏が説きたい様に説く。

所以者何(しょーいーしゃーがー sho- i- sha- ga-)。

我以無數方便(がーいーむーしゅーほーべん ga- i- mu- shu- ho- ben)。

種種因縁(しゅーじゅーいんねん shu- ju- in nen)。

譬喩言辭(ひーゆーごんじー hi- yu- gon ji-)。

演説諸法(えんぜっしょーほー en ze^sho- ho-)。

理由は何かと言えば、

仏は無数の方便を用いて、

種々の因縁を用い、

譬えの言辭を用い、

諸々の法を演説する。

是法非思量分別(ぜーほーひーしーりょーふんべつ ze- ho- hi- shi- ryo- fun betsu)。

之所能解(しーしょーのーげー shi- sho- no- ge-)。

唯有諸仏(ゆいろうーしょーぶつ yui u- sho- butsu)。

乃能知之(ないのーちーしー nai no- chi- shi-)。

この法は凡夫の思いや考え、判断の心では
能く理解することが出来ないのであります。

ただ諸々の仏のみが、

この法を知る事が出来るのであります。

所以者何(しよーいーしゃーがー sho- i- sha- ga-)。

諸佛世尊(しよーぶっせーそん sho- bu^{se}- son)。

唯以一大事因縁故(ゆいいーいちだいじーいんねんこー yui i- ichi dai ji- in nen ko-)。

出現於世(しゅつげんのーせー shutsu gen no- se-)。

理由は何か、

諸々の諸仏、世尊は、

ただ一大事因縁(仏が、この世に産まれて来た、一番の理由と意義と使命は一切衆生成仏
の法を一切衆生に説く為)の故に、この世に出現したのであります。

舍利弗(しゃりほつ sharihotsu)。

云何名(うんがーみよー un ga- myo-)。

諸佛世尊(しよーぶっせーそん sho- bu^{se}- son)。

唯以一大事因縁故(ゆいいーいちだいじーいんねんこー yui i- ichi dai ji- in nen ko-)。

出現於世(しゅつげんのーせー shutsu gen no- se-)。

舍利弗よ、

どうして諸佛、世尊は、

ただ一大事因縁をもって、

この世に産まれて来たのでしょうか。

諸佛世尊(しよーぶっせーそん sho- bu^{se}- son)。

欲令衆生(よくりょーしゅーじょー yoku ryo- shu- jo-)。

開佛知見(かいぶっちーけん kai bu^{chi}- ken)。

使得清浄故(しーとくしよーじょーこー shi- toku sho- jo- ko-)。

出現於世(しゅつげんのーせー shutsu gen no- se-)。

諸仏世尊は一切衆生に頑なに閉ざされた煩悩の扉を【開】いて、凡夫の生命の根本に具わ
る仏の生命を見、知って貰いたい。

そして、清浄な仏の心を得させたいと欲するが故に、

この娑婆世界に出現したのであります。

欲示衆生(よくじーしゅーじょー yoku ji- shu- jo-)。

佛知見故(ぶっちーけんこー bu[^]chi- ken ko-)。

出現於世(しゅつげんの一せー shutsu gen no- se-)。

衆生に仏の生命を【示】そうと欲するが故に、
娑婆世界に出現したのであります。

欲令衆生(よくりょーしゅーじょー yoku ryo- shu- jo-)。

悟佛知見故(ごーぶっちーけんこー go- bu[^]chi- ken ko-)。

出現於世(しゅつげんの一せー shutsu gen no- se-)。

衆生に仏の生命を【悟】らせようと欲するが故に、
娑婆世界に出現したのであります。

欲令衆生(よくりょーしゅーじょー yoku ryo- shu- jo-)。

入佛知見道故(にゅーぶっちーけんどこー nyu- bu[^]chi- ken do- ko-)。

出現於世(しゅつげんの一せー shutsu gen no- se-)。

衆生に仏の生命をを知る事の出来る信心修行の道に、
【入】らせようと欲するが故に、
娑婆世界に出現したのであります。

※この【開・示・悟・入(妙法蓮華経の法・仏の生命、仏性)】が、仏が娑婆世界に出現した一大事因縁なのであります。つまり、一切の仏の目的は、一切衆生成仏であります。一切衆生も、この世に生まれ出た目的が、一切衆生成仏である事に目覚めなければいけない事を示しているのであります。一切衆生成仏の法を示さない仏は権仏(途中の道標の働きで仮の仏であり、信仰の対象になる本仏ではありません)

舍利弗(しゃりほつ sharihotsu)。

是為諸佛(ぜーいーしょーぶつ ze- i- sho- butsu)。

唯以一大事因縁故(ゆいーいちだいじーいんねんこー yui i- ichi dai ji- in nen ko-)。

出現於世(しゅつげんの一せー shutsu gen no- se-)。

舍利弗よ、

一切の全ての諸仏は、

皆、唯一大事因縁の為に

世の中に出現したのであります。

佛告舍利弗(ぶつごーしゃりほつ butsu go- sharihotsu)。

諸佛如来(しょーぶつによーらい sho- butsu nyo- rai)。

但教化菩薩(たんきょーけーぼーさつ tan kyo- ke- bo- satsu)。

仏が舍利弗に告げて言うには、

諸佛如来は、

但菩薩を教化します。

※仏は悟りを得たので、法を説きますが、菩薩はまだ悟りを得ていない修行者なので衆生に対して法は説きません。

諸有所作(しょーうーしょーさー sho- u- sho- sa-)。

常為一事(じょーいーいちじー jo- i- ichi ji-)。

仏の諸々の所作振舞は、

ただこの開示悟入が唯一の目的の為であります。

唯以佛之知見(ゆいーいーぶッしーちーけん yui i- bu[^]shi- chi- ken)。

示悟衆生(じーごーしゅーじょー Ji- go- shu- jo-)。

ただ仏の知見をもって、

衆生にこの妙法蓮華經の法を示し悟らせる為です。

舍利弗(しゃりほつ sharihotsu)。

如来但以(にょーらいたん にー nyo- rai tan ni-)。

一佛乘故(いちぶつじょーこー ichi butsu jo- ko-)。

為衆生説法(いーしゅーじょーせッぽー i- shu- jo- se[^]po-)。

舍利弗よ、

仏はただ一つの妙法蓮華經の法をもって、

衆生の為にこの妙法蓮華經の法を説きます。

無有餘乘(むーうーよーじょー mu- u- yo- jo-)。

若二若三(にやくにーにやくさん nyaku ni- nyaku san)。

この妙法蓮華經の一切衆生成仏の法以外に、

二つとか三つとか一切衆生成仏の法が複数あるわけではありません。

舍利弗(しゃりほつ sharihotsu)。

一切十方諸佛法亦如是(いっさいじッぽーしょーぶッぽーやくにょーぜー i[^]sai ji[^]po- sho- bu[^]po- yaku nyo- ze-)。

舍利弗よ、

私の説く妙法蓮華經の法だけが、そうなので無く、一切十方の諸佛の法も同じくそうなのであります。

※釈尊の説く妙法蓮華經の法も一切十方の諸仏が悟った法も同じ妙法蓮華經の法なのです。

舍利弗(しゃりほつ sharihotsu)。

過去諸佛(かーこーしょーぶつ ka- ko- sho- butsu)。

以無量無数方便(いーむーりょーむーしゅーほーべん i- mu- ryo- mu- shu- ho- ben)。

舍利弗よ、

過去の時代からの数え切れない諸佛方も、
数え切れない方便の教えと、

種種因縁(しゅーじゅーいんねん shu- ju- in nen)。
譬喩言辭(ひーゆーごんじー hi- yu- gon ji-)。
而為衆生(にーいーしゅーじょー ni- i- shu- jo-)。
演説諸法(えんぜッしよーほー en ze^sho- ho-)。
色々な原因、縁、結果の話と、
譬え話の言葉を使って、
一切衆生の為に、
諸法を演説したのであります。

是法皆為(ぜーほーかいいー ze- ho- kai i-)。
一佛乘故(いちぶつじょーこー ichi butsu jo- ko-)。
それらの法は、皆、
妙法蓮華經の唯一の法を説く為の方便の故であります。

是諸衆生(ぜーしよーしゅーじょー ze- sho- shu- jo-)。
從諸佛聞法(じゅーしよーぶつもんぼー ju- sho- butsu mon po-)。
究竟皆得(くーきよーかいとく ku- kyo- kai toku)。
一切種智(いっさいしゅーちー i^sai shu- chi-)。
この法を聞いた多くの衆生は、
諸々の仏から聞いた法に従って、
最後に皆、妙法蓮華經の法を信受することが出来たのであります。

舍利弗(しゃりほつ sharihotsu)。
未來諸佛(みーらいしよーぶつ mi- rai sho- butsu)。
當出於世(とーしゅつおーせー to- shutsu o- se-)。
舍利弗よ、
未來の諸仏は、
まさに世の中に現れて、

亦以無量(やくいーむーりよー yaku i- mu- ryo-)。
無数方便(むーしゅーほーべん mu- shu- ho- ben)。
種種因縁(しゅーじゅーいんねん shu- ju- in nen)。
譬喩言辭(ひーゆーごんじー hi- yu- gon ji-)。
而為衆生(にーいーしゅーじょー ni- i- shu- jo-)。
演説諸法(えんぜッしよーほー en ze^sho- ho-)。
また無量無数の方便の教えと、
種々の因縁話、

譬えの言葉をもって、
衆生の為に、
諸法を演説するのであります。

是法皆為(ぜーほーかいいー ze- ho- kai i-)。
一佛乘故(いちぶつじょーこー ichi butsu jo- ko-)。
これ等の法も皆妙法蓮華經の法へ導く下準備として説くのであります。

是諸衆生(ぜーしょーしゅーじょー ze- sho- shu- jo-)。
従佛聞法(じゅーぶつもんぽー ju- butsu mon po-)。
究竟皆得(くーきょーかいとく ku- kyo- kai toku)。
一切種智(いっさいしゅーちー i^sai shu- chi-)。
この諸々の衆生も、
諸佛に従って法を聞く事は、
最終的には皆一切衆生が仏と成る種智(妙法蓮華經という仏の生命)を得る為であります。

舍利弗(しゃりほつ sharihotsu)。
現在十方(げんざいじッぽー gen zai ji^po-)。
無量百千萬億(むーりょーひゃくせんまんのく mu- ryo- hyaku sen man noku)。
佛土中(ぶつどーちゅー butsu do- chu-)。
諸佛世尊(しょーぶッせーそん sho- bu^se- son)。
多所饒益(たーしょーによーやく ta- sho- nyo- yaku)。
安樂衆生(あんらくしゅーじょー an raku shu- jo-)。
舍利弗よ、
現在の十方の、
無量百千萬億の、
仏土の中において、
諸佛世尊は、
沢山の所において衆生を利益し、
安樂にさせています。

是諸佛(ぜーしょーぶつ ze- sho- butsu)。
亦以無量(やくいーむーりょー yaku i- mu- ryo-)。
無数方便(むーしゅーほーべん mu- shu- ho- ben)。
種種因縁(しゅーじゅーいんねん shu- ju- in nen)。
譬喩言辭(ひーゆーごんじー hi- yu- gon ji-)。
而為衆生(にーいーしゅーじょー ni- i- shu- jo-)。
演説諸法(えんぜッしよーほー en ze^sho- ho-)。
これ等の諸佛も、
また、無量無数の方便と、

種々の因縁、譬えの言葉を以って、
衆生の為に、
諸法を演説します。

是法皆為(ぜーほーかいいー ze- ho- kai i-)。
一佛乘故(いちぶつじょーこー ichi butsu jo- ko-)。
これ等の法も、全て、その目的は、
唯一の一仏乗の妙法蓮華經の法を説く為であります。

是諸衆生(ぜーしょーしゅーじょー ze- sho- shu- jo-)。
従佛聞法(じゅーぶつもんぽー ju- butsu mon po-)。
究竟皆得(くーきょーかいとく ku- kyo- kai toku)。
一切種智(いっさいしゅーちー i^sai shu- chi-)。
この諸々の衆生は、
十方の全ての仏に従って法を聞き、
ついに一切衆生成仏の種である、
妙法蓮華經の法を得る事が出来ます。

舍利弗(しゃりほつ sharihotsu)。
是諸佛(ぜーしょーぶつ ze- sho- butsu)。
但教化菩薩(たんきょーけーぼーさつ tan kyo- ke- bo- satsu)。
舍利弗よ、
これらの諸仏は、
方便の教を説く事無く、ただ妙法蓮華經の一乗の法を教化します。

欲以佛之知見(よくいーぶッしーちーけん yoku i- bu^shi- chi- ken)。
示衆生故(じーしゅーじょーこー ji- shu- jo- ko-)。
釈尊は自分が悟った妙法蓮華經の法を知り見る事によって、
同じく衆生に妙法蓮華經の法を示そうと欲する故に、

欲以佛之知見(よくいーぶッしーちーけん yoku i- bu^shi- chi- ken)。
悟衆生故(ごーしゅーじょーこー go- shu- jo- ko-)。
釈尊は自分が悟った妙法蓮華經の法を知り見る事によって、
同じく衆生に妙法蓮華經の法を悟らせようと欲するが故に、

欲令衆生(よくりょーしゅーじょー yoku ryo- shu- jo-)。
入佛知見道故(にゅーぶッちーけんどーこー nyu- bu^chi- ken do- ko-)。
一切衆生に、釈尊と同じ妙法蓮華經の法に入らしめんと欲するが故に、

舍利弗(しゃりほつ sharihotsu)。

我今亦復如是(がーこんやくぶーによーぜー ga- kon yaku bu- nyo- ze-)

知諸衆生(ちーしょーしゅーじょー chi- sho- shu- jo-)

有種種欲(うーしゅーじゅーよく u- shu- ju- yoku)

深心所著(じんしんしょーぢやく jin shin sho- jaku)

舍利弗よ、

私は、現在、今迄と同じ様に、

諸々の衆生には、色々な欲望が有り、

心に深い執着が有る事を知った上で、

隨其本性(ずいごーほんじょー zui go- hon jo-)

以種種因縁(いーしゅーじゅーいんねん i- shu- ju- in nen)

譬喩言辭(ひーゆーごんじー hi- yu- gon ji-)

方便力故(ほーべんりッこー ho- ben ri^ko-)

而為説法(にーいーせッぽー ni- i- se^po-)

その衆生の本性に従って、

種々の因縁の説法、

譬え話、色々な言葉、

方便の話を以って、法華經以前の三乗の教えを説法して来ました。

舍利弗(しゃりほつ sharihotsu)。

如此皆為(によーしーかいいー nyo- shi- kai i-)

得一佛乘(とくいちぶつじょー toku ichi butsu jo-)

一切種智故(いッさいしゅーちーこー i^sai shu- chi- ko-)

舍利弗よ、

かくの如き事は皆、

妙法蓮華經の一乘法を一切衆生が、仏の種として得る為の手段としてやって来た事であり
ます。

舍利弗(しゃりほつ sharihotsu)。

十方世界中(じッぽーせーかいちゅー ji^po- se- kai chu-)

尚無二乘(じょーむーにーじょー jo- mu- ni- jo-)

何況有三(がーきょーうーさん ga- kyo- u- san)

舍利弗よ、

この十方の世界の中には、もう

二乗(声聞・縁覚)の教えは有りません。

ましてや、三乗(声聞・縁覚・菩薩)の教えも有りません。

舍利弗(しゃりほつ sharihotsu)。

諸佛出於(しょーぶつしゅッとー sho- butsu shu^to-)

五濁悪世(ごーじょくあくせー go- joku aku se-)

舎利弗よ、
一切の諸仏は、
五濁悪世の世に出て来るのであります。

所謂劫濁(しょーいーこーじょく sho- i- ko- joku)。

煩惱濁(ぼんのーじょく bon no- joku)。

衆生濁(しゅーじょーじょく shu- jo- joku)。

見濁(けんじょく ken joku)。

命濁(みょーじょく myo- joku)。

いわゆる、劫濁(時代の濁り、社会の人口が増すに従って、環境問題、人種差別、貧富の争いが増し人心が濁る)

煩惱濁(一人一人の人間の心に起こる迷い、憎しみ、怒り、嫉妬の絡み合う動物的本能の濁り)

衆生濁(文明が進むに従って人間の心身ともに高齢、病気によって衰え濁る)

見濁(邪見、偏見による思想を暴力や殺戮によって押し付ける濁り)

命濁(生活が乱れ、薬物、食品、添加物、空気、水質等々の生命を脅かすものが氾濫する濁り)

如是舎利弗(にょーぜーしゃりほつ nyo- ze- sharihotsu)。

劫濁亂時(こーじょくらんじー ko- joku ran ji-)。

衆生垢重(しゅーじょーくーじゅー shu- jo- ku- ju-)。

慳貪嫉妬(けんどんしつとー ken don shi^to-)。

成就諸不善根故(じゅーじゅーしょーふーぜんごんこー jo- ju- sho- fu- zen gon ko-)。

かくのごとく、舎利弗よ、

劫濁の時には、

衆生の濁りは重く、

自分だけ良ければ良いという心と、嫉妬心が強く、

諸々の成仏する事と反対の不善根を沢山積んでいく為。

諸佛以方便力(しょーぶついーほーべんりき sho- butsu i- ho- ben riki)。

於一佛乘(おーいちぶつじょー o- ichi butsu jo-)。

分別説三(ふんべつせつさん fun be^se^san)。

諸佛は方便の力を以って、

一佛乗の妙法蓮華經の法を、

わざわざ、声聞、縁覚、菩薩の三乗の教えに分けて教化したのであります。

舎利弗(しゃりほつ sharihotsu)。

若我弟子(にやくがーでーしー nyaku ga- de- shi-)。

自謂阿羅漢(じーいーあーらーかん ji- i- a- ra- kan)。

辟支佛者(ひやくしーぶつしゃー hyaku shi- bu^sha-)。

不聞不知(ふーもんふーちー fu- mon fu- chi-)。

舎利弗よ、

若し私の弟子の中で、

自ら自分は阿羅漢であると言ったり、

辟支佛であると言ったり、

することを私は聞いた事も無く、知る事も無い。

諸佛如来(しょーぶつによーらい sho- butsu nyo- rai)。

但教化菩薩事(たんきょーけーぼーさつじー tan kyo- ke- bo- satsu ji-)。

此非佛弟子(しーひーぶつでーしー shi- hi- butsu de- shi-)。

非阿羅漢(ひーあーらーかん hi- a- ra- kan)。

非辟支佛(ひーひゃくしーぶつ hi- hyaku shi- butsu)。

一切の諸佛如来よ、

私は、一心に妙法蓮華経の法を菩薩しか、教化しないという事を、

聞かない知らない衆生は、

これは私の弟子ではありませんし、

阿羅漢でもありません。

辟支佛でもありません。

又舎利弗(うーしゃりほつ u- sharihotsu)。

是諸比丘(ぜーしょーびく ze- sho- biku)。

比丘尼(びくにー bi ku ni-)。

また、舎利弗よ、

この諸々の、比丘、

比丘尼、の中で、

自謂已得(じーいーいーとく ji- i- i- toku)。

阿羅漢(あーらーかん a- ra- kan)。

是最後身(ぜーさいごーしん ze- sai go- shin)。

究竟涅槃(くーきょーねーはん ku- kyo- ne- han)。

自分はすでに、

阿羅漢の位(※小乗教の悟り)を得て、

苦しみの人間として、生死輪廻の最後の身であり、(※成仏すれば、二度と人間に生まれて来る事は無いので、最後の身と表現)

最後の涅槃であると慢心を以って思い込み。

便不復志求(べんふーぶーしーぐー ben fu- bu- shi- gu-)。

阿耨多羅三藐三菩提(あーのくたーらーさんみやくさんぼーだい a- noku ta- ra- san myaku san bo- dai)。

すなわち、また、真実の法を求める志を持たず、

成仏を求めようとせず。

當知此輩(と一ち一し一はい to- chi- shi- hai)。
皆是増上慢人(かいぜ一ぞ一じよ一まんにん kai ze- zo- jo- man nin)。
當に知るべし、これ等の輩は、
皆増上慢の人であります。

所以者何(しよ一い一しゃ一が一 sho- i- sha- ga-)。
若有比丘(にやくう一び一く一 nyaku u- bi- ku-)。
實得阿羅漢(じつとくあ一ら一かん ji^toku a- ra- kan)。
ゆえんはいかん、
もし修行者として、
眞実の阿羅漢を得た者であるならば、

若不信此法(にやくふ一しんし一ほ一 nyaku fu- shin shi- ho-)。
無有是處(む一う一ぜ一しよ一 mu- u- ze- sho-)。
間違っても、この妙法蓮華經の法を信じないという事は無いはずだ、
この妙法蓮華經の法を説法する、この場所に居るわけが無い。

除佛滅度後(じよ一ぶつめつど一ご一 jyo- butsu metsu do- go-)。
現前無佛(げんぜんむ一ぶつ gen zen mu- butsu)。
仏が入滅した後に、
眼の前に仏がない状態であっても、

所以者何(しよ一い一しゃ一が一 sho- i- sha- ga-)。
佛滅度後(ぶつめつど一ご一 butsu metsu do- go-)。
如是等經(によ一ぜ一と一きよ一 nyo- ze- to- kyo-)。
受持読誦(じゅ一じ一どくじゅ一 ju- ji- doku ju-)。
解其義者(げ一ご一ぎ一しゃ一 ge- go- gi- sha-)。
是人難得(ぜ一にんなんとく ze- nin nan toku)。
ゆえんはいかん、
仏が入滅した後、
かくのごとき、妙法蓮華經の法と等しい御經を、
受持、読誦し、
解釈する者(仏)がいたら、
この人は、とても得難い人(仏)であります。

若遇餘佛(にやくぐ一よ一ぶつ nyaku gu- yo- butsu)。
於此法中(お一し一ほ一ちゆ一 o- shi- ho- chu-)。
便得決了(べんとッけッりよ一 ben to^ke^ryo-)。

もし、この人（仏） 遇う事が出来るのならば、
この妙法蓮華經の法をの中において、
すなわち、一切の法華經以前の方便の教えを捨てて、この妙法蓮華經の法をのみに決め、
終わらなければいけないのであります。

舍利弗(しゃりほつ sharihotsu)。

汝等當一心信解(にょーとーとーいっしんしんげー nyo- to- to- i^shin shin ge-)。

受持佛語(じゅーじーぶつごー ju- ji- butsu go-)。

舍利弗よ、

汝等は、まさに妙法蓮華經の法だけを信ずる、心を一つにして、

信じ、理解し、

妙法蓮華經の法を受持しなければいけません。

諸佛如来(しよーぶつにょーらい sho- butsu nyo- rai)。

言無虚妄(ごんむーこーもー gon mu- ko- mo-)。

無有餘乘(むーうーよーじょー mu- u- yo- jo-)。

唯一佛乘(ゆいいちぶつじょー yui ichi butsu jo-)。

諸佛如来の、

説く言葉には虚妄はありません。

二乗、三乗の方便の教えはいりません。

唯、妙法蓮華經の一乗の法のみであります。

妙法蓮華經(みよーほーれんげーきよー myo- ho- ren ge- kyo-)。

如来壽量品(にょーらいじゅーりょーほん nyo- rai ju- ryo- hon)。

第十六(だいじゅーろく dai ju- roku)。

爾時佛告(にーじーぶつごー ni- ji- butsu go-)。

諸菩薩(しよーぼーさつ sho- bo- satsu)。

及一切大衆(ぎゅーいっさいだいしゅー gyu- i^sai dai shu-)。

その時に仏は、

諸菩薩、

及び、一切の大衆に告げた、

諸善男子(しよーぜんなんしー sho- zen nan shi-)。

汝等當信解(にょーとーとーしんげー nyo- to- to- shin ge-)。

如来誠諦之語(にょーらいじょーたいしーごー nyo- rai jo- tai shi- go-)。

諸々の善男子よ（本門に入ると二乗はいなくなり、全て平等世界になります）

汝等、まさに信じ理解しなさい、

如来の真実の法を示した言葉を信じ理解して下さい。

復告大衆(ぶーごーだいしゅー bu- go- dai shu-)。

汝等當信解(によーとーとーしんげー nyo- to- to- shin ge-)。

如来誠諦之語(によーらいじょーたいしーごー nyo- rai jo- tai shi- go-)。

重ねて諸々の大衆に仏が告げ、

汝等、まさに信じ理解しなさい、

如来の言葉は真実であります。

又復告諸大衆(うーぶーごーしょーだいしゅー u- bu- go- sho- dai shu-)。

汝等當信解(によーとーとーしんげー nyo- to- to- shin ge-)。

如来誠諦之語(によーらいじょーたいしーごー nyo- rai jo- tai shi- go-)。

又復諸々の大衆に仏が告げ、

汝等、まさに信じ理解しなさい、

如来の言葉は真実であります。

是時菩薩大衆(ぜーじーぼーさつだいしゅー ze- ji- bo- satsu dai shu-)。

彌勒為首(みーろくいーしゅー mi- roku i- shu-)。

合掌白佛言世尊(がッしよーびやくぶつごんせーそん ga^sho- byaku butsu gon se- son)。

唯願説之(ゆいがんせッしー yui gan se^shi-)。

我等當信受佛語(がーとーとーしんじゅーぶつごー ga- to- to- shin ju- butsu go-)。

如是三白已(によーぜーさんびやくいー nyo- ze- san byaku i-)。

この時、菩薩大衆が、

彌勒菩薩を党首として、

合掌して仏に申し上げるには、

復言(ぶーごん bu- gon)。

唯願説之(ゆいがんせッしー yui gan se^shi-)。

我等當信受佛語(がーとーとーしんじゅーぶつごー ga- to- to- shin ju- butsu go-)。

又、又言うに、

ただ願はくば、この妙法蓮華經の法を説いて下さい。

我等は當に仏の言葉を信受しますから。

爾時世尊(にーじーせーそん ni- ji- se- son)。

知諸菩薩(ちーしょーぼーさつ chi- sho- bo- satsu)。

三請不止(さんしょーふーしー san sho- fu- shi-)。

その時に世尊は、

諸々の菩薩が三回も願って、

断念しなかった事を知って、

※方便品の三止三請と同様、三回妙法蓮華經の法を説く事を願う事は、釈尊の教えを聞くという立場から、自分達自身の成仏の法を得るといふ、釈尊主体から衆生主体覚悟への変換を示す。

而告之言(にーごーしーごん ni- go- si- gon)。
汝等諦聽(にょーとーたいちよー nyo- to- tai cho-)。
如来秘密(にょーらいひーみつ nyo- rai hi- mitsu)。
神通之力(じんづーしーりき jin zu- shi- riki)。
皆に、こう告げた、
汝等諦かに聴け、
如来の秘密(一切衆生即身成仏の法)神通の力を。

一切世間天人(いっさいせーけんてんにん i^sai se- ken ten nin)。
及阿脩羅(ぎゅーあーしゅーらー gyu- a- shu- ra-)。
一切世間の衆生及び、天人、
及び、阿脩羅(初めは善神であったが後に善神に逆らう悪神となった)も、

皆謂今釈迦牟尼佛(かいいーこんしゃかむにぶつ kai i- kon shaka muni butsu)。
出釋氏宮(しゅっしやくしーくー shu^shaku shi- ku-)。
去伽耶城不遠(こーがーやーじょーふーおん ko- ga- ya- jo- fu- on)。
坐於道場(ざーおーどーじょー za- o- do- jo-)。
得阿耨多羅(とくあーのくたーらー toku a- noku ta- ra-)。
三藐三菩提(さんみやくさんぼーだい san myaku san bo- dai)。
皆は今の釈迦牟尼仏が、
迦毘羅城の王宮を出て、
伽耶城の近くの道場において坐し、
成仏を得たと、思っているだろうが、

然善男子(ねんぜんなんしー nen zen nan shi-)。
我實成佛已來(がーじつじょーぶついーらい ga- jitsu jo- butsu i- rai)。
無量無邊(むーりよーむーへん mu- ryo- mu- hen)。
百千萬億(ひやくせんまんのく hyaku sen man noku)。
那由佉劫(なーゆーたーこー na- yu- ta- ko-)。
しかるに善男子よ、
我は實に成仏してよりこのかた、
無間で量る事の出来ない、無限領域、百千萬億、
那由佉劫の時間を経ているのであります。

譬如五百千萬億那由佉(ひーにょーごーひやくせんまんのくなーゆーたー hi- nyo- go- hyaku sen man noku na- yu- ta-)。

阿僧祇(あーそーぎー a- so gi-)。

三千大千世界(さんぜんだいせんぜーかい san zen dai sen ze- kai)。

譬えば、五百千万億那由佉

阿僧祇の、

三千大千世界を、

假使有人(けーしーうーにん ke- shi- u- nin)。

抹為微塵(まっちーみーじん ma^chi- mi- jin)。

たとえば、ある人が、粉末にして微塵とし、

過於東方(かーおーとーぼー ka- o- to- bo-)。

五百千萬億(ごーひゃくせんまんのく go- hyaku sen man noku)。

那由佉(なーゆーたー na- yu- ta-)。

阿僧祇國(あーそーぎーこく a- so- gi- koku)。

乃下一塵(ないげーいちじん nai ge- ichi jin)。

東方の五百千万億那由佉阿僧祇の国を過ぎて、

一塵を落とし、

※この表現を「五百塵点劫」と言います。森羅万象（三千大世界）を打ち砕いて、微塵とし、東方へ五百千万億那由佉阿僧祇（数え切れない）の国を通過したら一塵を落とし、これを同様に繰り返し、その微塵が盡きた時、この微塵を置いた国と、置かぬ国を一つにして、再び微塵に砕き、その一塵を一劫（176 km正立方体の大石に三年に一度天女が舞い降りて来て、その着物が大石の表面を撫ぜ、天に帰る、それを繰り返し、大石が摩滅し無くなるまでの時間を、一劫）と数える。釈尊が仏に成ってから今迄の時間は、五百千万億那由佉阿僧祇劫である。気が遠くなるような永遠に思える長遠の時間と考えますが、五百千万億との表現は有限で有り、永遠ではありません。

如是東行(にょーぜーとーぎょー nyo- ze- to- gyo-)。

盡是微塵(じんぜーみーじん jin ze- mi- jin)。

このようにして、東に進みこの粉末の微塵一粒づつを落とし乍進み、微塵が盡きるまでの距離と広さ、

諸善男子(しよーぜんなんしー sho- zen nan shi-)。

於意云何(おーいーうんがー o- i- un ga-)。

是諸世界(ぜーしよーせーかい ze- sho- se- kai)。

可得思唯校計(かーとくしーゆいきょーけー ka-toku shi- yui kyo- ke-)。

知其數不(ちーごーしゅーふー chi- go- shu- fu-)。

諸々の善男子（信仰している男性）よ、

心に想像して考えてみて下さい。

是の諸々の世界は、

私達が思惟し、計算して
その数を知る事が出来るでしょうか。

弥勒菩薩等(みーろくぼーさつとー mi- roku bo- sa^to-)

俱白佛語(くーびやくぶつごん ku- byaku butsu gon)。

世尊(せーそん se- son)。

是諸世界(ぜーしょーせーかい ze- sho- se- kai)。

無量無邊(むーりょーむーへん mu- ryo- mu- hen)。

非算數所知(ひーさんじゅーしょーちー hi- san ju- sho- chi-)。

亦非心力所及(やくひーしんりきしよーぎゅー yaku hi- shin riki sho- gyu-)。

弥勒菩薩 (釈尊が亡くなってから五十六億七千万年後に世の中を救う菩薩と經文に説かれているが、五十六億七千万年以前に本尊にして拝んでいる人々がいます。弥勒菩薩が法華經に登場するという事は、弥勒菩薩も法華經の行者であり、衆生を救うのは弥勒菩薩でなく、弥勒菩薩が信心修行している妙法蓮華經の法である事を世間の人々は見失っています)も話に加わり、

世尊、

是の諸々の世界は、

無量無邊で、

算数で割り出す事は出来ません。

又、私達の思考力想像力の及ぶ所ではありません。

※この世の中は、神や、特別な存在が造ったもので無く、本然として存在している無量無邊のものである。

一切聲聞(いっさいしよーもん i^sai sho- mon)。

辟支佛(ひやくしーぶつ hyaku shi- butsu)。

以無漏智(いーむーろーちー i- mu- ro- chi-)。

不能思惟(ふーのーしーゆい fu- no- shi- yui)。

知其限數(ちーごーげんしゅー chi- go- gen shu-)。

一切の聲聞、

辟支佛が、

無漏智 (一点の漏れもないと思われる智慧) を以って思惟しても、

其の限りや広さ、時間の長さを知る事は出来ません。

我等住(がーとーじゅー ga- to- ju-)。

阿唯越致地(あーゆいおっちーぢー a- yui o^chi- ji-)。

於是事中(おーぜーじーちゅー o- ze- ji- chu-)。

亦所不達世尊(やくしよーふーだつせーそん yaku sho- fu- da^se- son)。

如是諸世界(にょーぜーしょーせーかい nyo- ze- sho- se- kai)。

無量無邊(むーりょーむーへん mu- ryo- mu- hen)。

我々は、阿唯越致地（不退転の位）に心が住んでいるけれど、
いま、世尊が言った、
この諸々の世界を計算を、
達成する事は、出来ない事だ、世尊よ、
是の如く諸々の世界は、
無量無邊であります。

爾時佛告(にーじーぶつごー ni- ji- butsu go-)。
大菩薩衆(だいぼーさっしゅー dai bo- sa^shu-)。
諸善男子(しょーぜんなんしー sho- zen nan shi-)。
今當分明(こんとーふんみよー kon to- fun myo-)。
宣語汝等(せんごーによーとー sen go- nyo- to-)。
その時仏は、聴衆に告げた、
大菩薩衆よ、
諸々の善男子よ、
今まさに、分かりやすく、
汝等に法を宜ぶ、

是諸世界(ぜーしょーせーかい ze- sho- se- kai)。
若著微塵(にやくちやくみーじん nyaku chaku mi- jin)。
及不著者(ぎゅーふーちやくしゃー gyu- fu- chaku sha-)。
盡以為塵(じんにーいーじん jin ni- i- jin)。
一塵一劫(いちじんいっこー ichi jin i^ko-)。
是の諸々の世界は、
もし実際に、歩いて微塵を落した者も、
落して無い者も、
無関係に同一にして微塵として、
その一塵を一劫と数えます。

我成仏已来(がーじょーぶついーらい ga- jo- butsu i- rai)。
復過於此(ぶーかーおーしー bu- ka- o- shi-)。
百千萬億(ひやくせんまんのく hyaku sen man noku)。
那由佗(なーゆーたー na- yu- ta-)。
阿僧祇劫(あーそーぎーこー a- so- gi- ko-)。
私（仏）は、妙法蓮華經の法を悟り仏になってより以来、
又、現在まで、百千萬億那由他阿僧祇劫の時間が経過しています。

自從是来(じーじゅーぜーらい ji- ju- ze- rai)。
我常在此娑婆世界(がーじょーざいしーしゃーばーせーかい ga- jo- zai shi- sya- ba- se- kai)。

説法教化(せっぽーきょーけー se^po- kyo- ke-)。

仏と成ってから現在まで、
私は常にこの娑婆世界に在って、
説法教化して来たのです。

※三妙（本因妙・本果妙・本国土妙。壽量品に説かれる順番は本国土妙・本果妙・本因妙
であります。）本国土妙（戒壇）仏は、この娑婆世界を自分の担当の国土として、一切衆
生に妙法蓮華經の法を説示してきました。

亦於餘處(やくおーよーしょー yaku o- yo- sho-)。

百千萬億(ひゃくせんまんのく hyaku sen man noku)。

那由佉(なーゆーたー na- yu- ta-)。

阿僧祇國(あーそーぎーこく a- so- gi- koku)。

導利衆生(どーりーしゅーじょー do- ri- shu- jo-)。

また、他所の、

百千萬億

那由佉

阿僧祇劫の国々に於いても、

衆生を導き、正法を信ずる事によって利益が有る事を説いてきました。

諸善男子(しょーぜんなんしー sho- zen nan shi-)。

於是中間(おーぜーちゅーげん o- ze- chu- gen)。

我說然燈佛等(がーせつねんどーぶつとー ga- setsu nen do- bu^to-)。

又復言其(うーぶーごんごー u- bu- gon go-)。

入於涅槃(にゅーおーねーはん nyu- o- ne- han)。

諸々の善男子よ、

この五百千万億から現在までの中間に、

釈尊が過去世で修行中、然燈仏を師匠として修行し、未来成仏の記別（約束）を受けた。

その時の功德によって、

涅槃（悟り・成仏）に入る事が出来た。のであります。

如是皆以(にょーぜーかいいー nyo- ze- kai i-)。

方便分別(ほーべんぶんべつ ho- ben fun betsu)。

これ等の話は、皆

真実の法へ衆生を導く為に方便を分別（整理）して説いた事で、真実ではありません。

諸善男子(しょーぜんなんしー sho- zen nan shi-)。

若有衆生(にゃくうーしゅーじょー nyaku u- shu- jo-)。

諸々の善男子よ、

もし、衆生がいて、

来至我所(らいしーがーしょー rai si- ga- sho-)。
我以佛眼(がーいーぶつげん ga- i- bustu gen)。
觀其信等(かんごーしんとー kan go- shin to-)。
諸根利鈍(しょーこんりーどん syo- kon ri- don)。
隨所應度(ずいしょーおーどー zui sho- o- do-)。
處處自說(しょーしょーじーせつ sho- sho- ji- setsu)。
私の所へ来るならば、
私は仏眼をもって、
その人々の信仰心の姿を見て、
諸々の人々の理解力の状態を見て、
その人その人の心に応じて、
その場その場に応じて、法を説きます。

名字不同(みょーじーふーどー myo- ji- fu- do-)。
年紀大小(ねんきーだいしょー nen ki- dai sho-)。
亦復現言(やくぶーげんごん yaku bu- gen gon)。
當入涅槃(とーにゅーねーはん to- nyu- ne- han)。
私は過去に於いて色々な名前を持って世に出て、
その時その時の壽命も長かったり、短かったり。
又又、この世界に於いて、
當に亡くなった事を表現し語り。

又以種種方便(うーいーしゅーじゅーほうべん u- i- shu- ju- ho- ben)。
說微妙法(せつみーみょーほー setsu mi- myo- ho-)。
能令衆生(のーりょーしゅーじょー no- ryo- shu- jo-)。
發歡喜心(ほっかんぎーしん ho^kan gi- shin)。
又種々の方便を以って、
微妙の法(妙法蓮華經の法)を説き、
能く衆生に、
歡喜の心を起こさしめました。

諸善男子(しょーぜんなんしー syo- zen nan shi-)。
如来見諸衆生(にょーらいけんしょーしゅーじょー nyo- rai ken sho- shu- jo-)。
樂於小法(ぎょーおーしょーぼー gyo- o- sho- bo-)。
徳薄垢重者(とくはっくーじゅーしゃー toku ha^ku- ju- sha-)。
諸々の善男子よ、
仏は諸々の衆生を見、
小法(小乗の法)を願う
徳の薄い迷いの垢が重い者、

為是人説(いーぜーにんせつ i- ze- nin setsu)。

我少出家(がーしょーしゅっけー ga- sho- shu^ke-)。

得阿耨多羅三藐三菩提(とくあーのくたーらーさんみやくさんぼーだい toku a- noku ta- ra- san myaku san bo- dai)。

これ等の人々が成仏する事が出来る真実の法を得る為に、
私は若くして出家し、
阿耨多羅三藐三菩提（成仏）を得たのであります。

然我實成仏已来(ねんがーじつじょーぶついーらい nen ga- jitsu jyo- butsu i- rai)。

久遠若斯(くーおんにやくしー ku- on nyaku shi-)。

このように、私は妙法蓮華經の法によって成仏してから現在まで、
久遠から仏であったという内容の意味は、
こういうことなのであります。

但以方便(たんにーほーべん tan ni- ho- ben)。

教化衆生(きょーけーしゅーじょー kyo- ke- shu- jo-)。

令入佛道(りょーにゅーぶつどー ryo- nyu- butsu do-)。

作如是説(さーにょーぜーせつ sa- nyo- ze- setsu)。

ただ方便の教えを以って、
衆生を教化して、
仏道（仏に成る道）に入らせようとして、
是の様に、妙法蓮華經の法を説くのであります。

諸善男子(しゅーぜんなんしー syo- zen nan shi-)。

如来所演經典(にょーらいしゅーえんきょーでん nyo- rai sho- en kyo- den)。

皆為度脱衆生(かいいーどーだっしゅーじょー kai i- do- da^shu- jo-)。

諸々の善男子よ、
如来の演べるところの經典の目的は、
皆、一切の衆生を度脱(成仏)させる為であります。

※仏教の目的は【一切衆生成仏】であります。仏教と言いながら【一切衆生成仏】を説き示さないで、全て仏に任せなさい、仏が成仏させてあげようという内容は仏教ではありません。成仏は仏にさせて貰うものではありません。

或説己身(わくせっこーしん waku se^ko- shin)。

或説佗身(わくせつたーしん waku se^ta- shin)。

或いは仏の悟った中味を説き。
或いは他身（仏以外の衆生）を説き、

或示己身(わくじーこーしん waku ji- ko- shin)。

或示佗身(わくじーたーしん waku ji- ta- shin)。

或は己(仏)を示し、

或は他身を示し、

或示己事(わくじーこーじー waku ji- ko- ji-)。

或示佗事(わくじーたーじー waku ji- ta- ji-)。

或は己の事を示し、

或は他の事を示す。

諸所言説(しよーしよーごんぜつ sho- sho- gon zetsu)。

皆實不虛(かいじつふーこー kai jitsu fu- ko-)。

諸々の説法する所は、

皆真で虚は有りません。

所以者何(しよーいーしゃーがー sho- i- sha- ga-)。

如来如實知見(にょーらいにょーじっちーけん nyo- rai nyo- ji^{chi}- ken)。

三界之相(さんがいしーそうー san gai shi- so-)。

無有生死(むーうーしよーじー mu- u- sho- ji-)。

若退若出(にやくたいにやくしゅつ nyaku tai nyaku shutsu)。

所以はいかん、

仏は実の如く、

三界(欲界・色界・無色界)の姿を見て知って、

生死は無く、永遠常住であります。

一切衆生は、この道理から退く事も外れることもありません。

亦無在世(やくむーざいせー yaku mu- zai se-)。

及滅度者(ぎゅーめつどーしゃー gyu- metsu do- sha-)。

亦、仏の在世、及び滅度の差異もありません。

非實非虚(ひーじつひーこー hi- jitsu hi- ko-)。

非如非異(ひーにょーひーいー hi- nyo- hi- i-)。

實でもなく、虚でもなく、

見たままでもなく、異なった事でもありません。

不如三界(ふーにょーさんがい fu- nyo- san gai)。

見於三界(けんの一さんがい ken no- san gai)。

衆生が三界を見るが如くではありません。

如斯之事(にょーしーしーじー nyo- shi- shi- ji-)。

如来明見(にょーらいみょーけん nyo- rai myo- ken)。
無有錯謬(むーうーしゃくみょー mu- u- shaku myo-)。
かくのごときの事、
如来、明らかに見て、
誤りや偽りはありません。

以諸衆生(いーしよーしゅーじょー i- sho- shu- jo-)。
有種種性(うーしゅーじゅーしよー u- shu- ju- sho-)。
種種欲(しゅーじゅーよく shu- ju- yoku)。
種種行(しゅーじゅーぎょー shu- ju- gyo-)。
種種憶想(しゅーじゅーおくそー shu- ju- oku so-)。
分別故(ふんべっこー fun be^ko-)。
諸々の衆生を以って、
種々の性、
種々の欲、
種々の行、
種々の憶想到、
色々の別々が有る為に、

欲令生諸善根(よくりょーしよーしよーぜんごん yoku ryo- sho- sho- zen gon)。
以若干因縁(いーにゃっかんいんねん i- nya^kan in nen)。
譬喩言辭(ひーゆーごんじー hi- yu- gon ji-)。
種種説法(しゅーじゅーせっぽー shu- ju- se^po-)。
諸々の善根を生じさせようと欲して、
若干の因縁、
譬喩、言辭を以って、
種々の法を説きます。

所作佛事(しよーさーぶつじー sho- sa- butsu ji-)。
未曾暫廢(みーぞーざんぱい mi- zo- zan pai)。
仏の説法や振舞の全ては、
久遠の昔より、現在の法華経説法迄、いまだ暫くも休んだ事が有りません。

如是我成仏已来(にょーぜーがーじょーぶついでーらい nyo- ze- ga- jo- butsu i- rai)。
甚大久遠(じんだいくーおん jin dai ku- on)。
壽命無量(じゅーみょーむーりょー ju- myo- mu- ryo-)。
阿僧祇劫(あーそーぎーこー a- so- gi- ko-)。
常住不滅(じょーじゅーふーめつ jo- ju- fu- metsu)。
このように、私は仏になってより以来、
甚だ大いに久遠であり、

※本果妙（本尊）五百塵点劫の昔より仏として今日に至っている
壽命は、量る事が出来ず、

阿僧祇劫で、
常住にして不滅です。

諸善男子(しょーぜんなんしー sho- zen nan shi-)。
我本行菩薩道(がーほんぎょーぼーさつどー ga- hon gyo- bo- satsu do-)。
所成壽命(しょーじょーじゅーみょー sho- jo- ju- myo-)。
今猶未盡(こんゆーみーじん kon yu- mi- jin)。
諸々の善男子よ、
我（仏）本、仏に成る前に菩薩として修行をしていた時から、

費やしてきた壽命は、

※本因妙（題目）五百塵点劫より前は、凡夫の菩薩として妙法蓮華經の法を信心修行する
一人の人間にすぎなかった。本因妙は五百塵点劫より古いから勝れるとか時間の優劣をし
めしているのではなく、永遠常住の生命の本質は全て凡夫であるという中心の基軸を久遠
元初本因妙と表現する。

今、猶、未だ盡きません。

復倍上數(ぶーばいじょーしゅー bu- bai jo- shu-)。
然今非實滅度(ねんこんひーじつめつどー nen kon hi- jitsu metsu do-)。
而便唱言(にーべんしょーごん ni- ben sho- gon)。
當取滅度(とーしゅーめつどー to- shu- metsu do-)。
五百塵点劫よりも又又倍しています。
しかるに今、實に滅度ではないのに、
方便として、
滅度の姿を示します。

如来以是方便(にょーらいいーぜーほーべん nyo- rai i- ze- ho- ben)。
教化衆生(きょーけーしゅーじょー kyo- ke- shu- jo-)。
如来、是の方便を以って、
衆生を教化します。

所以者何(しょーいーしゃーがー sho- i- sha- ga-)。
若佛久住於世(にやくぶっくーじゅーおーせー nyaku bu^ku- ju- o- se-)。
薄徳之人(はくとくしーにん haku toku shi- nin)。

不種善根(ふーしゅーぜんごん fu- shu- zen gon)。

所以はいかん、

もし、仏が、この世に永久に生き住み続けたとしたら、

徳の薄い人は、

善根(妙法蓮華經の法を修行)を種(植)える事が出来ず、

貧窮下賤(びんぐーげーせん bin gu- ge- sen)。

貧著五欲(とんじゃくごーよく ton jaku go- yoku)。

入於憶想(にゅーおーおくそー nyu- o- oku so-)。

妄見網中(もーけんもーちゅー mo- ken mo- chu)。

貧しく、苦しみ、とことん賤しい人格で、

五欲(色欲、声欲、香欲、味欲、蝕欲)から起こる、

憶想、妄見の網の中に入り絡まる。

若見如来(にゃっけんによーらい nya^ken nyo- rai)。

常在不滅(じょーざいふーめつ jo- zai fu- metsu)。

便起憍恣(べんきーきょーしー ben ki- kyo- shi-)。

而懷厭怠(にーえーえんだい ni- e- en dai)。

若し仏が常にいて、

不滅であると見れば、

すなわち、慢心を起こし、

しかも、法を壊し、嫌い、怠けの心を起こし、

不能生於(ふーのーしゅーおー fu- no- sho- o-)。

難遭之想(なんぞーしーそー nan zo- si- so-)。

恭敬之心(くーぎょーしーしん ku- gyo- shi- shin)。

生きて仏に遭うという事は難しく、

仏を敬い、尊敬する心を持たなければ、いけないという心を失ってしまう。

是故如来(ぜーこーによーらい ze- ko- nyo- rai)。

以方便説(いーほーべんせつ i- ho- ben setsu)。

比丘當知(びーくーとーちー bi- ku- to- chi)。

諸佛出世(しゅーぶっしゅっせー sho- bu^shu^se-)。

難可値遇(なんかーちーぐー nan ka- chi- gu-)。

是の故に仏は、

方便の説法を以って、

比丘よ、良く知りなさい、仏にも生滅が有る事を、

だから、諸佛が、この世に出た時に衆生が仏に遇える事は、とても難しい事なのであります。

所以者何(しょーいーしゃーがー sho- i- sha- ga-)。

諸薄徳人(しょーはくとくにん sho- haku toku nin)。

過無量百千萬億劫(かーむーりょーひやくせんまんのッこー ka- mu- ryo- hyaku sen man no^ko-)。

或有見佛(わくうーけんぶつ waku u- ken butsu)。

或不見者(わくふーけんしゃー waku fu- ken sha-)。

そのわけは、

諸々の徳の薄い人々は、

無量百千萬億劫という年月を経て、

ようやく仏に会える事の出来る人間もいれば、

それだけ過ぎてても会えない人もいます。

以此事故(いーしーじーこー i- shi- ji- ko-)。

我作是言(がーさーぜーごん ga- sa- ze- gon)。

諸比丘(しょーびーくー sho- bi- ku-)。

如来難可得見(にょーらいなんかーとッけん nyo- rai nan ka- to^ken)。

斯衆生等(しーしゅーじょーとー shi- shu- jo- to-)。

聞如是語(もんによーぜーごー mon nyo- ze- go-)。

必當生於(ひッとーしょーおー hi^to- sho- o-)。

難遭之想(なんぞーしーそー nan zo- shi- so-)。

心懷戀慕(しんねーれんぼー shin ne- ren bo-)。

この事を以っての故に、

私は重ねて、この事を説きます。

諸々の比丘よ、

本当に、仏に会う事は大変な事なんだという想いを生じ、

心に仏を恋い慕う心を抱き、

渴仰於佛(かつごーおーぶつ katsu go- o- butsu)。

便種善根(べんしゅーぜんごん ben shu- zen gon)。

仏を、喉が渴き切った者が水を欲しがるように、求め仰ぎ、

便ち、善根(妙法蓮華経)を植えようと思い、

是故如来(ぜーこーによーらい ze- ko- nyo- rai)。

雖不實滅(すいふーじつめつ sui fu- jitsu metsu)。

而言滅度(にーごんめつどー ni- gon metsu do-)。

この故に仏は、

実際には入滅せずとも、

しかし、滅度した姿を見せます。

又善男子(うーぜんなんしー u- zen nan shi-)。

諸佛如来(しよーぶつによーらい sho- butsu nyo- rai)。

法皆如是(ほーかいによーぜー ho- kai nyo- ze-)。

為度衆生(いーどーしゅーじよー i- do- shu- jo-)。

皆實不虛(かいじつふーこー kai jitsu fu- ko-)。

又善男子、

諸佛如来は、

法は皆このように、

衆生を成仏させんが為に、滅する事も当然ですから、身をもって法を示すのです。

説く法は皆、実にして、虚しくはありません。

譬如良医(ひーによーろーいー hi- nyo- ro- i-)。

智慧聰達(ちーえーそーだつ chi- e- so- datsu)。

明鍊方薬(みょーれんほーやく myo- ren ho- yaku)。

善治衆病(ぜんぢーしゅーびよー zen ji- shu- byo-)。

譬えば、良い医者如く、

智慧は明らかで聡く真実の法に達し、

種々の薬に明るく調合し作る事が出来、

良く、衆生の病気を治す事が出来ます。

其人多諸子息(ごーにんたーしよーしーそく go- nin ta- sho- shi- soku)。

若十(にやくじゅー nyaku ju-)。

二十(にーじゅー ni- ju-)。

乃至百數(ないしーひやくしゅー nai shi- hyaku shu-)。

この良い医者は、父として多くの子供がいます。

十人若しくは、

二十人、

乃至百人にも及びます。

※一切衆生を子供と考え一切衆生の中の、全ての声聞、縁覚、菩薩を人数で表現していません。

以有事縁(いーうーじーえん i- u- ji- en)。

遠至餘國(おんしーよーこく on shi- yo- koku)。

父は旅に行かなければいけない用事が出来、

遠い餘所の国に行きました。

※医者である父は、治療の為に使う薬の中には毒薬もある為、絶対に触ってはいけないと強く注意をして出掛けます。旅に出掛けるのは、父が居るけれども、居なくなるという、滅、不滅を表現しています。

諸子於後(しょーしーおーごー sho- shi- o- go-)。
飲佗毒薬(おんたーどくやく on ta- doku yaku)。
薬發悶亂(やくほつもんらん yaku hotsu mon ran)。
宛轉于地(えんでんうーぢー en den u- ji-)。
諸々の子供達は、父が居なくなって後、
毒薬を飲んでしまいます。

※触ってはいけないと言われると、触りたくなる。己の迷いによって、成仏出来ない方便の教えを信じ込み、苦しみの地獄に墮ちる姿を表現しています。

是時其父(ぜーじーごーぶー ze- ji- go- bu-)。
還来歸家(げんらいきーけー gen rai ki- ke-)。
その時、遠い国から、
家に帰って来て、

諸子飲毒(しょーしーおんどく sho- shi- on doku)。
或失本心(わくしつほんしん waku shitsu hon shin)。
或不失者(わくふーしっしやー waku fu- shi^sha-)。
遙見其父(よーけんごーぶー yo- ken go- bu-)。
皆大歡喜(かいだいかんぎー kai dai kan gi-)。
諸々の子供達が、毒を飲み、
或る子どもは本心を失い、
或る子供は毒が薄く本心までは失わず苦しんでいるだけの者もあり、
本心を失った状態で、ぼんやりと遙かに其の父を見て、
皆、大いに歡喜します。

拝跪問訊(はいきーもんじん hai ki- mon jin)。
善安穩歸(ぜんなんのんきー zen nan non ki-)。
我等愚痴(がーとーぐーちー ga- to- gu- chi-)。
誤服毒薬(ごーぶくどくやく go- buku doku yaku)。
願見救療(がんけんくーりよー gan ken ku- ryo-)。
更賜壽命(きょーしーじゅーみよー kyo- shi- ju- myo-)。
子供達は父にすがって、拝み問い尋ねます。
毒を飲む以前の様な善安で穏やかな状態に帰してください。
我々は愚痴にして、
誤り毒を飲んでしまいました。
願わくば、この状態を見て治療し救って下さい。
そして、更に壽命を賜って下さい。

※ただ治療し生命を助けて下さい。という意味では無く、毒を飲む前の妙法蓮華經の仏性

を知らない生命から、妙法蓮華經の仏性を自覚した生命に蘇生する事を表現しています。
信仰すれば病気が治り、寿命が更に延びると示していると考えている人々がいますが、間違いです。

父見子等(ぶーけんしーとー bu-ken shi- to-)。
苦惱如是(くーのーによーぜー ku- no- nyo- ze-)。
依諸經方(えーしょーきょーほー e- sho- kyo- ho-)。
求好薬草(ぐーこーやくそー gu- ko- yaku so-)。
父は子供の、このような苦悩の姿を見て、
諸々の医学の方法を駆使して、
病に好いとされる薬草を森羅万象に求め、

色香美味(しきこーみーみー shiki ko- mi- mi-)。
皆悉具足(かいしつぐーそく kai shitsu gu- soku)。
擣篋和合(とーしーわーごー to- shi- wa- go-)。
與子令服(よーしーりょーぶく yo- shi- ryo- buku)。
色も香りも美味しさも、
皆悉く具足し、
父が擣き、篋いにかけて、丸薬として和合し、
子供達(一切衆生)に、服すようにした、

而作是言(にーさーぜーごん ni- sa- ze- gon)。
此大良薬(しーだいろうやく shi- dai ro- yaku)。
色香美味(しきこーみーみー shiki ko- mi- mi-)。
皆悉具足(かいしつぐーそく kai shitsu gu- soku)。
そうして、この言葉を発した、
この大良薬は、
色も、香りも、美味しさも、
皆具足しています。

如等可服(によーとーかーぶく nyo- to- ka- buku)。
速除苦悩(そくじょーくーのー soku jo- ku- no-)。
無復衆患(むーぶーしゅーげん mu- bu- shu- gen)。
汝等、服しなさい、
そうすれば速やかに苦悩を除き、
今の苦しみ以外の諸々の病苦も無くなります。

其諸子中(ごーしょーしーちゅー go- sho- shi- chu-)。
不失心者(ふーしっしんしゃー fu- shi^shin sha-)。
見此良薬(けんしーろーやく ken shi- ro- yaku)。

色香俱好(しきこーぐーこー shiki ko- gu- ko-)。
即便服之(そくべんぶくしー soku ben buku shi-)。
病盡除愈(びょーじんじょーゆー byo- jin jo- yu-)。
其の諸々の子供達の中で、
心を失ってない者は、
この色香美味の良薬を見て、
色も香りも俱に好みと感じ、
即座にこの薬を自ら服した、

餘失心者(よーしっしんしゃー yo- shi^shin sha-)。
見其父来(けんごーぶーらい ken go- bu- rai)。
雖亦歡喜問訊(すいやっかんぎーもんじん sui ya^kan gi- mon jin)。
求索治病(ぐーしゃくじーびょー gu- shaku ji- byo-)。
然與其藥(ねんよーごーやく nen yo- go- yaku)。
餘の心を失ってしまっている子供達は、
父が旅から帰って来た事を、
喜びながらも、自分達で苦しみを招いた事を忘れ、私は何故こんなに苦しまなければいけ
ないのですかと、
父を問い詰め、どうしたら治るかと求めるけれども、
父が、この薬を與ても、

而不肯服(にーふーこーぶく ni- fu- ko- buku)。
所以者何(しょーいーしゃーがー sho- i- sha- ga-)。
毒氣深入(どっけーじんじゆー do^ke- jin nyu-)。
失本心故(しっぽんじんこー shi^pon jin ko-)。
薬を服さない、
何故ならば、
毒気が心身深く入り、
その人の本心を失っている故に、

於此好色香薬(おーしーこーしきこーやく o- shi- ko- shiki ko- yaku)。
而謂不美(にーいーふーみー ni- i- fu- mi-)。
この、色も香りも好ましい薬を、
好ましいと思えない。

父作是念(ぶーさーぜーねん bu- sa- ze- nen)。
此子可憐(しーしーかーみん shi- shi- ka- min)。
為毒所中(いーどくしょーちゆー i- doku sho- chu-)。
心皆顛倒(しんかいてんどー shin kai ten do-)。
父はこの状態を見て、

この子供達は憐れむべき者達だ、
毒の為に心が破られ、
こころが皆顛倒（正が邪に見え、邪が正に見える）している。

雖見我喜(すいけんがーきー sui ken ga- ki-)。
求索救療(ぐーしゃくーりょー gu- sha^ku- ryo-)。
如是好薬(にょーぜーこーやく nyo- ze- ko- yaku)。
而不肯服(にーふーこーぶく ni- fu- ko- buku)。
我（父）を見て、喜び、
子供達自身が救ってくれ、治療してくれと求めたにもかかわらず、
このような良い薬を、
強情にも服しようとしなない。

我今當設方便(がーこんとーせつほーべん ga- kon to- setsu ho- ben)。
令服此薬(りょーぶくしーやく ryo- buku shi- yaku)。
即作是言(そくさーぜーごん soku sa- ze- gon)。
我（父）今まさに方便の教えを設けて、
この薬を服させよう、
その為に、この言葉を発した、

汝等當知(にょーとーとーちー nyo- to- to- chi-)。
我今衰老(がーこんすいろー ga- kon sui ro-)。
死時已至(しーじーいーしー shi- ji- i- shi-)。
是好良薬(ぜーこーろーやく ze- ko- ro- yaku)。
今留在此(こんるーざいしー kon ru- zai shi-)。
汝可取服(にょーかーしゅーぶく nyo- ka- shu- buku)。
勿憂不差(もっつーふーさい mo^tsu- fu- sai)。
汝等當に知りなさい、
我（父）は今、衰え老いて、
死ぬ時が已に来ました、
私の最後の願いとして是の良薬を、
今此処に留め置きます。
汝等、取って服しなさい。
もし、飲んで苦しみの状態が良くならなかつたとしても、
憂いたり悲しんだりしてはいけません。※自業自得での苦しみ。毒の深さ、毒を飲んでからの時間によって、各々症状が違う。病苦から脱する事が目的でなく、妙法蓮華經の仏性に目覚める事（成仏）が目的である事を示す為に、突き放した表現をしている。

作是教已(さーぜーきょーいー sa- ze- kyo- i-)。
復至佗國(ぶーしーたーこく bu- shi- ta- koku)。

この教えを伝え終わって、
父は又、苦しんでいる子供を置いて他国に向かって旅に出ます。

遣使還告(けんしーげんごー ken shi- gen go-)。

汝父已死(にょぶーいーしー nyo- bu- i- shi-)。

是時諸子(ぜーじーしょーしー ze- ji- sho- shi-)。

父は旅先から、使い(※釈尊滅後上行菩薩が妙法蓮華經の法を末法の衆生に伝える事を示す)を家に向かわせ、子供たちに伝えます。

あなた方の父親は旅先で死にました。

聞父背喪(もんぶーはいそー mon bu- hai so-)。

心大憂悩(しんだいうーのー shin dai u- no-)。

子供達は父が旅先で亡くなった事を聞くと、

心は大いに憂い悩み悲しみ、

而作是念(にーさーぜーねん ni- sa- ze- nen)。

若父在者(にやくぶーざいしゃー nyaku bu- zai sha-)。

慈愍我等(じーみんがーとー ji- min ga- to-)。

能見救護(のーけんくーごー no- ken ku- go-)。

子供達は、こう思いました。

若し父がいてくれたならば、

私達に、慈しみ、愍みを持って、

能く見守ってくれますが、

今者捨我(こんしゃーしゃーがー kon sha- sha- ga-)。

遠喪佗國(おんそーたーこく on so- ta- koku)。

今、私達を捨てて、

遠い佗國で亡くなってしまいました。

自惟孤露(じーゆいこーろー ji- yui ko- ro-)。

無復恃怙(むーぶーじーこー mu- bu- ji- ko-)。

自分達だけで考えてみると、ほったらかしにされたような孤独で、朝露に濡れるがままの家も無い様で、

また、頼みとする者も無い。

常懷悲感(じょーえーひーかん jo- e- hi- kan)。

心遂醒悟(しんづいしょーごー sin zui sho- go-)。

常に悲しみの心を抱いて、

心は遂に醒め悟った。

乃知此藥(ないちしやく nai chi- shi- yaku)。

色香味美(しきこみみ shiki ko- mi- mi-)。

即取服之(そくしゅぶくしー soku shu- buku shi-)。

毒病皆愈(どくびょかいゆー doku byo- kai yu-)。

父が亡くなった今となつては、父の言い残した、この薬しかなく、
この薬が、色も香りも美味しさも備えている事を考え直して知って、
即座に手に取り、服した。

服すると、毒の病苦は皆治りました。

其父聞子(ごぶもんしー go- bu- mon shi-)。

悉已得差(しっちーとくさい shi[^]chi- toku sai)。

尋便来帰(じんべんらいきー jin ben rai ki-)。

咸使見之(げんしーけんしー gen shi- ken shi-)。

子供達の父は旅の地で、子供たちが薬を飲み病苦が治った報告を受け、
子供が悉く助かった事を知り、
父はすぐさま家に帰り、
全ての子供達に会いました。

諸善男子(しょぜんなんしー sho- zen nan shi-)。

於意云何(おーいーうんがー o- i- un ga-)。

頗有人能(はーうーにんのー ha- u- nin no-)。

説此良医(せしーろーいー se[^]shi- ro- i-)。

虚妄罪不(こーもーざいふー ko- mo- zai fu-)。

不也世尊(ほっちやーせーそん ho[^]cha- se- son)。

諸々の善男子よ、

この話の内容を聞いて、どの様に思いますか、
もし誰かが、

この良医(父)がやった事、言った事(死んでいないのに死んだと伝えた事)虚妄だと言
うものがないだろうか。

仏様、その様に受け取る者はいません。

佛言我亦如是(ぶつごんがーやくにょぜ butsu gon ga- yaku nyo- ze-)。

成仏已来(じょぶついーらい jo- butsu i- rai)。

無量無邊(むーりよーむーへん mu- ryo- mu- hen)。

百千萬億(ひやくせんまんのく hyaku sen man noku)。

那由佗(なーゆーたー na- yu- ta-)。

阿僧祇劫(あーそーぎーこー a- so- gi- ko-)。

佛が言うには、私も、今説いた話と同様に、
成仏してより現在まで、

無量無邊、

百千萬億、
那由佗、
阿僧祇劫の時間の中で、

為衆生故(いーしゅーじょーこー i- shu- jo- ko-)。

以方便力(いーほーべんりき i- ho- ben riki)。

言當滅度(ごんとーめつどー gon to- metsu do-)。

亦無有能(やくむーうーのー yaku mu- u- no-)。

如法説我(にょーほーせつがー nyo- ho- setsu ga-)。

虚妄過者(こーもーかーしゃー ko- mo- ka- sha-)。

爾時世尊(にーじーせーそん ni- ji- se- son)。

欲重宣此義(よくじゅーせんしぎ yoku ju- sen shigi)。

而説偈言(にーせつげーごん ni- setsu ge- gon)。

一切衆生の為の故に、

方便の説法、表現力を以って、

當に亡くなったと説いても、

それは真実の法を説く為であり、

私を嘘つきと非難する人はいないでしょう。

その時に仏は、重ねてこの重要な意味を強調し述べようと、

偈文にして、説法されました。

自我得佛来(じーがーとくぶっらい ji- ga- toku bu^{rai})。

所経諸劫數(しよーきよーしよーこっしゅー sho- kyo- sho- ko^{shu-})。

無量百千萬(むーりょーひやくせんまん mu- ryo- hyaku sen man)。

億載阿僧祇(おくさいあーそーぎー oku sai a- so- gi-)。

我(仏)成仏してから、このかた、

経たる所の諸々の劫數(年数)

無量百千萬

億載阿僧祇です。

常説法教化(じょーせつぽーきよーけー jo- se^{po-} kyo- ke-)。

無數億衆生(むーしゅーおくしゅーじょー mu- shu- oku shu- jo-)。

令入於佛道(りょーにゅーおーぶつどー ryo- nyu- o- butsu do-)。

爾来無量劫(にーらいむーりょーこー ni- rai mu- ryo- ko-)。

常に法を説き、

無數億の衆生を教化して、

仏道に入らしめて来た、

そのことを始めた時より現在迄無量劫の時が流れました。

為度衆生故(いーどーしゅーじょーこー i- do- shu- jo- ko-)。

方便現涅槃(ほーべんげんねーはん ho- ben gen ne- han)。

衆生を度(成仏する為に妙法蓮華經の法に目覚め修行を志す)せんが為に、
方便の教え(亡くなっていないのに亡くなった)を使って、涅槃(成仏)の姿を表す。

而實不滅度(にーじつふーめつどー ni- jitsu fu- metsu do-)。

常住此説法(じょーじゅーしーせつぽー jo- ju- shi- se^po-)。

しかも実には滅度していない、
常に、どの様な、山、谷、曠野等々どんな處でも、妙法蓮華經の法を説いているのであります。

我常住於此(がーじょーじゅーおーしー ga- jo- ju- o- shi-)。

以諸神通力(いーしょーじんづーりき i- sho- jin zu- riki)。

令顛倒衆生(りょーてんどーしゅーじょー ryo- ten do- shu- jo-)。

雖近而不見(すいごんにーふーけん sui gon ni- fu- ken)。

私が常に此処に住して妙法蓮華經の法を説いて、
諸々の神通力を以って、
真実の法を真実の法と見る事が出来ない(不信の者・末法の衆生は全て顛倒)衆生には、
近くであっても見る事が出来ない(睫毛の様に)自分に仏の生命が具わっていても、仏の
自覚を得る事が出来ない。

衆見我滅度(しゅーけんがーめつどー shu- ken ga- metsu do-)。

廣供養舍利(こーくーよーしゃーりー ko- ku- yo- sha- ri-)。

咸皆懷戀慕(げんかいえーれんぼー gen kai e- ren bo-)。

而生渴仰心(にーしょーかつごーしん ni- syo- katsu go- shin)。

一切衆生は私が亡くなるのを見て、
広い地域に散骨して、多くの人々が供養するでしょう。

※実際には釈尊の予言通り、釈尊滅後世界中に釈尊を供養する為の仏舍利塔が建立されました。

ことごとく皆恋慕の心を懐いて、
渴仰の心を生じるでしょう。

衆生既信伏(しゅーじょーきーしんぶく shu- jo- ki- shin buku)。

質直意柔輒(しちじきいーにゅーなん shichi jiki i- nyu- nan)。

衆生既に信じ伏し、
正直で心が素直に柔らかくなり、

一心欲見佛(いっしんよっけんぶつ i^shin yo^ken butsu)。

不自惜身命(ふーじーしゃくしんみよー fu- ji- shaku shin myo-)。

一心（仏と衆生の心が、仏の目的、価値と一つの心になり信じる）に仏を見奉らんと欲し、自ら身命（妙法蓮華經の法を自分の生命と感じ、自分の生命を掛けて信じる）を惜しまず、

時我及衆僧（じーがーぎゅーしゅーぞー ji- ga- gyu- shu- zo-）。

出靈鷲山（くーしゅつりょーじゅーせん ku- shutsu ryo- ju- sen）。

時に我（仏）及び衆僧、

※仏と一切衆生が師弟一箇する。

俱に靈鷲山（一切の仏は妙法蓮華經の法を悟って仏になる事が出来た。その法華經が説かれた靈鷲山に一切の諸仏諸菩薩が参集しているので、成仏を遂げた一切衆生も一切の諸仏諸菩薩と共に靈鷲山に生まれるという信仰の世界観）に生まれ、

我時語衆生（がーじーごーしゅーじょー ga- ji- go- shu- jo-）。

常在此不滅（じょーざいしーふーめつ jo- zai shi- fu- metsu）。

以方便力故（いーほーべんりッこー i- ho- ben ri^ko-）。

現有滅不滅（げんうーめつふーめつ gen u- metsu fu- metsu）。

我、時に衆生に語る、

仏は常に此処に在って滅せず、

方便の力を以って、

滅不滅が有る事を現す。

餘國有衆生（よーこくうーしゅーじょー yo- koku u- shu- jo-）。

恭敬信樂者（くーぎょーしんぎょーしゃー ku- gyo- shin gyo- sha-）。

我復於彼中（がーぶーおーひーちゅー ga- bu- o- hi- chu-）。

為説無上法（いーせつむーじょーほー i- setsu mu- jo- ho-）。

この娑婆世界以外の餘所の國の衆生であっても、

謹み敬い信じ眞実の法を願う者があれば（妙法蓮華經の法を求める者があれば）

私は、又そのような彼等の中に於いて、

彼等の為に無上の法（これ以上の法は無いという一切衆生成仏の妙法蓮華經の法を）を説きます。

汝等不聞此（にょーとーふーもんしー nyo- to- fu- mon shi-）。

但謂我滅度（たんにーがーめつどー tan ni- ga- metsu do-）。

我見諸衆生（がーけんしゅーしゅーじょー ga- ken sho- shu- jo-）。

沒在於苦海（もつざいおーくーかい motsu zai o- ku- kai）。

汝等（多くの人々）、この妙法蓮華經の法を聞かずして、

ただ私が滅度したと思ひ込んでいる。

私が諸々の衆生を見ると（方便の教えと眞実の教えとの違いを理解出来ないで）

迷いの苦界に沒在している。

故不為現身(こーふーいーげんしん ko- fu- i- gen shin)。

令其生渴仰(りょーごーしょーかつごー ryo- go- sho- katsu go-)。

因其心恋慕(いんごーしんれんぼー in go- shin ren bo-)。

乃出為說法(ないしゅついーせつぽー nai shutsu i- se^po-)。

それ故、亡くなった姿を表し、

衆生が亡くなった仏に会いたいと渴仰の心を生じさせ、

心に恋慕の心を起こさせることによって、(衆生が強く求める時に信仰心が起き、そこに仏が現れる)

仏は世に出て妙法蓮華經の法を説法するのであります。

神通力如是(じんづーりきによーぜー jin zu- riki nyo- ze-)。

於阿僧祇劫(おーあーそーぎーこー o- a- so- gi- ko-)。

常在靈鷲山(じょーざいりょーじゅーせん jyo- zai ryo- ju- sen)。

及餘諸住處(ぎゅーよーしょーじゅーしょー gyu- yo- sho- ju- sho-)。

神通力(仏の趣くままに真実の法を説く力)かくの如し、

数える事の出来ない無限とも思える時間の中に於いて、

本当は常に、この靈鷲山に在って、

真実の法を求めようとする衆生がいる處であれば、どこにでも私はいるのであります。

衆生見劫盡(しゅーじょーけんこーじん shu- jo- ken ko- jin)。

大火所燒時(だいかーしょーしょーじー dai ka- sho- sho- ji-)。

我此土安穩(がーしーどーあんのん ga- shi- do- an non)。

天人常充滿(てんにんじょーじゅーまん ten nin jo- ju- man)。

衆生の劫が尽きて、

※本来劫は無始無終永遠常住なので尽きるものではありませんが、衆生は謗法深重によって有始有終と考え自分の煩惱の大火で自分を焼き尽くしてしまう。

大火に焼かれると見る時も、

我が(仏)此の土(仏国土)は安穩にして、

諸天善神も人間も共に常に充滿しています。

園林諸堂閣(おんりんしょーどーかく on rin sho- do- kaku)。

種種寶莊嚴(しゅーじゅーほーしょーごん shu- ju- ho- sho- gon)。

寶樹多華果(ほーじゅーたーけーかー ho- ju- ta- ke- ka-)。

園林や諸々の堂閣を、

種々の寶を以って莊嚴し、

寶樹には華果が多く咲き実り、

衆生所遊樂(しゅーじょーしよーゆーらく shu- jo- sho- yu- raku)。
諸天撃天鼓(しよーてんぎゃくてんくー sho- ten gyaku ten ku-)。
常作衆伎樂(じょーさーしゅーぎーがく jo- sa- shu- gi- gaku)。
雨曼陀羅華(うーまんだーらーけー u- man da- ra- ke-)。
散佛及大衆(さんぶつぎゅーだいしゅー san butsu gyu- dai shu-)。
一切の人々が真実の法に叶って心豊かに過ごす場所には、
諸天は天鼓を撃って、
常に諸々の伎樂を作り、
曼荼羅華を降らし(真実の法が説かれる場所に諸天善神が天上から降らす花びらの雨)
佛及び大衆の上に散します。

我浄土不毀(がーじょーどーふーきー ga- jo- do- fu- ki-)。
而衆見燒盡(にーしゅーけんしよーじん ni- shu- ken sho- jin)。
我が仏の浄土は常住にして毀れないのに、
衆生の土は、煩惱の大火に焼き盡くされてしまうのであります。

憂怖諸苦惱(うーふーしよーくーのー u- fu- sho- ku- no-)。
如是悉充滿(にょーぜーしつじゅーまん nyo- ze- shitsu ju- man)。
憂い、悲しみ、迷い、怖さ、諸々の苦しみ悩み、
かくの如きものが、心にも体にも世の中に充滿しているのであります。

是諸罪衆生(ぜーしよーざいしゅーじょー ze sho- zai shu- jo-)。
以悪業因縁(いーあくごーいんねん i- aku go- in nen)。
過阿僧祇劫(かーあーそーぎーこー ka- a- so- gi- ko-)。
不聞三寶名(ふーもんさんぼーみょー fu- mon san bo- myo-)。
この諸々の罪の衆生は、
悪業の因縁を以って、
阿僧祇劫の無数劫の長い時間を過ぎても、
仏法僧の三寶の名前すら聞く事が出来ないなのであります。

※妙法蓮華經の法を汚した罪の縁によって地獄に墮ちる苦しみよりも、妙法蓮華經の法に縁する事が無かった為に、三寶の名前も聞けず彷徨う方が苦しみは深い。

諸有修功德(しよーうーしゅーくーどく sho- u- shu- ku- doku)。
柔和質直者(にゅーわーしちじきしゃー nyu- wa- shichi jiki sha-)。
則皆見我身(そっかいけんがーしん so^kai ken ga- shin)。
在此而説法(ざいしーにーせッぽー zai shi- ni- se^po-)。
諸々の、あらゆる功德を修し、
仏法に対して柔和忍辱、質直、正直、素直な人々は、
則ち、我が身(仏)が此処(法華經の内容上は靈鷲山、仏滅後に於いては法華經受持の所

全て靈鷲山) に在って、
この妙法蓮華經の法を説法されている佛の姿が見えるのであります。

或時為此衆(わくじーいーしーしゅー waku ji- i- shi- shu-)。

説佛壽無量(せつぶつじゅーむーりょー setsu butsu ju- mu- ryo-)。

久乃見佛者(くーないけんぶッしゃー ku- nai ken bu^sha-)。

為説佛難値(いーせつぶつなんちー i- setsu butsu nan chi-)。

或る時は、この衆生の為に、

仏の生命は、人智では量る事が出来ないと説き、

遠い昔から、修行を重ねて来たので、仏を見れる、仏に成れると考えている者には、

そういう考えでは、仏を見る事も出来ないと私は説きます。

※歴劫修行を否定し。歴劫修行では成仏の法に出会う事は出来ないと断言。

我智力如是(がーちーりきによーぜー ga- chi- riki nyo- ze-)。

慧光照無量(えーこーしょーむーりょー e- ko- sho- mu- ryo-)。

壽命無數劫(じゅーみょーむーしゅーこー ju- myo- mu- shu- ko-)。

私(仏)の悟った妙法蓮華經の智力は是のような内容で、

それから出る智慧の力は十方の無量(一切衆生に伝え照らし)を照らし、

壽命は無量無數劫であります。(一切衆生の生命も無始無終永遠常住である)

久修業所得(くーしゅーごーしょーとく ku- shu- go- sho- toku)。

汝等有智者(によーとーうーちーしゃー nyo- to- u- chi- sha-)。

勿於此生疑(もッとーしーしょーぎー mo^to- shi- sho- gi-)。

この法は久遠よりの妙法蓮華經の法を修行をした事によって得た悟りの法であります。

汝等、妙法蓮華經の智慧の有る者は、

ここに於いて、仏が説く、仏の壽命が無量であるという事に対して、

疑いを生じてはならない。

當断令永盡(とーだんりょーよーじん to- dan ryo- yo- jin)。

佛語實不虛(ぶつごーじッぷーこー butsu go- ji^pu- ko-)。

當に疑いを断じて、永遠に妙法蓮華經の法だけを信じなければいけない。

仏語は一切衆生成仏の法だけを説き、一切衆生成仏だけを願っているのであって、全ては

實語であり、一言も虚は無いのだから。

如医善方便(によーいーぜんほーべん nyo- i- zen ho- ben)。

為治狂子故(いーじーおーしーこー i- ji- o- shi- ko-)。

實在而言死(じつざいにーごんしー jitsu zai ni- gon shi-)。

良医が善い方便を以って、

狂子の心を治す為に、

実際には生きているのに死んだと説いた。

無能説虚妄(むーのーせッこーもー mu- no- se^ko- mo-)。

我亦為世父(がーやくいーせーぶー ga- yaku i- se- bu-)。

救諸苦患者(くーしょーくーげんしゃー ku- sho- ku- gen sha)。

しかし、そのことに対して、私は嘘をついたという者がいない様に、
私も亦、この世の父として、(神の様に天地創造の父とか主人とかの意味では無く、私は荒唐無稽な天地創造は主張しません。森羅万象、天地は如何なる道理で営まれているのかの法(道理)を明らかにし、その法へ衆生を導く事を父と表現します)
諸々の苦しみを救う者なり。

為凡夫顛倒(いーぼんぶーてんどー i- bon bu- ten do-)。

實在而言滅(じつざいにーごんめつ jitsu zai ni- gon metsu)。

以常見我故(いーじょーけんがーこー i- jo- ken ga- ko-)。

而生憍恣心(にーしょーきょーしーしん ni- sho- kyo- shi- shin)。

凡夫が顛倒する姿を見て、
実際には滅していないけれど、滅したと説いたのであります。
常に私が生きてると、私にいつでも会えると、
驕りや慢心を持った衆生は(真実の法を求めようともせず)我儘な思いを生じます。

放逸著五欲(ほーいつちやくごーよく ho- itsu jaku go- yoku)。

墮於惡道中(だーおーあくどーちゅー da- o- aku do- chu-)。

やりたい放題で、五欲(色欲、声欲、香欲、味欲、触欲)に執着し、
三悪道(地獄、餓鬼、畜生)に堕ちてしまいます。

我常知衆生(がーじょーちーしゅーじょー ga- jo- chi- shu- jo-)。

行道不行道(ぎょーどーふーぎょーどー gyo- do- fu- gyo- do-)。

隨應所可度(ずいおーしょーかーどー zui o- sho- ka- do-)。

為説種種法(いーせッしゅーじゅーほー i- se^shu- ju- ho-)。

私は常に一切衆生の心が、どういう状態にあるのか知っています。
真実の妙法蓮華經の法を行ずる人も、行じない人がいる事も、
まさに度(成仏)すべき所に従って(たとえどんな衆生であっても、成仏する事を願って)
種々の法を説くのであります。

每自作是念(まいじーさーぜーねん mai ji- sa- ze- nen)。

以我令衆生(いーがーりょーしゅーじょー i- ga- ryo- shu- jo-)。

得入無上道(とくにゅーむーじょーどー toku nyu- mu- jo- do-)。

速成就佛身(そくじょーじゅーぶッしーん soku jo- ju- bu^shi- n)。

私は常に妙法蓮華經の念をもって、
どうしたら衆生が、

無上道（これ以上の法は無いという一切衆生成仏の妙法蓮華經の法を）を信じ修行する道に入り、
速やかに仏身を成就（仏に成仏させて貰うのではなく、自らの生命に具わる妙法蓮華經の
仏の生命に目覚め成仏する事）することを得させたいと。

観念文 (Kannenmon)

※観念とは、自他の成仏を求め、縁する生命に正法を伝えたいとする信仰心を言葉として
発音せず、観念文の内容を心の中で黙想し集中深化させる事。

この観念文は、日蓮大聖人の仏法の本質を示す凝縮された語句を用いていますので、解
釈がどうしても長くなる事をはじめにお断りしておきます。

◎初座(Syoza) (天拝 Tenpai)

生身妙覚自行の御利益 (Sho-jin myo-kaku jigyo- no goriyaku)

※仏は産まれる前から仏だったのでなく、私達と同じ凡夫だったのであります。

森羅万象、全ての生命は十界互具の凡夫なのであります。その凡夫の中から一切衆生成
仏の法を探究する崇高な価値観、目的観を持って、菩薩（信仰者、修行者）として精進し
た結果、森羅万象の根本に本然として具わっている、一切衆生成仏の法を悟った人を仏と
いうのであります。しかし、仏に成っても、一切衆生成仏の法を一切衆生に説く、時代、
立場、娑婆世界以外の国土の担当等々条件が違う、末法の一切衆生の成仏に責任を有しな
い仏は、権仏、迹仏として、一切衆生成仏の法へ衆生の機根を整える権経、迹経（仮の教
え）を説くだけで、総べての仏が悟った本門の妙法蓮華經の法を説かない、説けないので
あります。一切衆生に、この一切衆生成仏の法である、南無妙法蓮華經をありのままに説
き示す事を仏の使命と責任とした方を、本仏と称するのであります。

「生身妙覚」とは、日蓮大聖人は、我々一切衆生と同じ生身の凡夫の身をもって、法華
經の行者として、法華經の教えを身で読む生涯を送りました。そして、着る物、食べる物
に事欠き、住む所を追われ、どんなに貧しく、大難四ヶ度小難数しれずと称され、生命の
危険に晒され、石や悪口を投げられながらも、法華經の行者として生きる姿こそが成仏で
ある事を、我々末法の衆生に説き示してくれました。

「自行」一切衆生それぞれの機根に合わせて法を説くのでなく、仏の立場から、一切衆生
成仏の法を真っ直ぐに随自意として示されました。

この日蓮大聖人が一切衆生に生涯を通じて、身を持って示した一切衆生成仏の法を説き
切る事が出来たという御利益（功德）を、諸天善神も生涯を通じて守護してくれました。

・大梵天王 (Daibontenno-)

仏法守護の神で、私達の娑婆世界の主と説かれています。

・帝釈天王 (Taishakutenno-)

仏法を守護する諸天善神の代表的一人

・大日天王 (Dainittenno-)

地球から見た天体の中で、一番大きく、昼間平等に照らし、仕事、生活が成り立ち、明るく暖かく恵を与えてくれる太陽を神格化し、諸天善神の一人とする。

・大月天王 (Daigattenno-)

夜空で一番大きく、闇夜を照らし、恩恵を与えてくれる月を神格化し、諸天善神の一人とする。

・大明星天王 (Daimyo-jo-tenno-)

月を除く星々の中で一番大きい金星を星の代表として神格化し、諸天善神の一人とする。月と同様に、生活暦、農耕暦、天候、方角等々を知る、大切な存在。

天照大神 (Tensho-daijin)

日本書記、古事記に、伊弉冉 (Izanami)、伊弉諾 (Izangi) の第一子で、大和 (日本) 朝廷の祖先神と記される為、皇室の権威の源とし、尊崇されるようになる。仏教では、天照大神に限らず、神は、仏法を守護する立場 (神本佛迹ではなく、法本神迹) の日本における代表的な善神の一人とする。日本独自の神で、当然、法華経には名前は出て来ません。

正八幡大菩薩 (Sho-hachimandaibosatu)

八幡大菩薩は元来農耕の神として豊前の國、宇佐にまつられ、付近で産出される銅の神としてもまつられました。奈良の東大寺、大仏殿建立に当り、銅産神として大仏建立に貢献したとして、奈良の手向山にまつられ、仏教との関係を持つ様になり、天応元年 (781年) 桓武天皇が八幡神に菩薩号を贈り、「八幡大菩薩」という神仏混交の象徴的存在となりました。出家者でもない天皇が、神に仏教の称号を与えるという、天皇の方が八幡神より上位という陳腐な行いを敢行しました。権力者が便利に重宝したことから、権力にあやかろうと全国津々浦々にまつられるようになり、軍神としても、まつりあげられるようになり、平安時代から第二次世界大戦に至るまでの、各、戦いに八幡大菩薩の旗がはためくようになりました。

日蓮大聖人の言う所の八幡大菩薩は、世間でまつりあげている、八幡大菩薩ではなく。諸天善神の一人として法華経守護の責務をまっとうする八幡大菩薩という意味で、「正」を付け「正八幡大菩薩 (真正の八幡大菩薩)」と表現される。本尊の中には、「八幡大菩薩」と顕し、「正」は付けられていませんが、本尊の中に顕すという事は、世間から脱して「正八幡大菩薩」と同意であります。深夜、龍ノ口刑場に引き立てられて行く時、鶴岡八幡宮に向かって、法華経守護の勤めを果たすよう呵責したのと同じ意味であります。

天照大神と同様、八幡大菩薩は日本独自の神で、当然、法華経には名前は出て来ません。しかし、日蓮大聖人は、森羅万象全ての諸天善神は、法華経の説法の場に参集したはずだ

から、一人一人の名前はあげられなくても、いたはずであるという考え方で、二人を日本代表の善神としてあげているのであります。日蓮大聖人の法は、日本の文化を世界各国で信仰する人々に強要強制するものではありませんので、世界各国で、日蓮大聖人の信仰する方々は各地各国の代表的神を、信仰の対象で無く、法華經守護の働きをする善神として観念の中に入れても、何ら差し支えないと思います。日本以外の国々の人々に、天照大神、正八幡大菩薩は何の意味も無いからであります。

等惣じて (to- so-jite)

法華經を説き始める説法の間（序品）に、大比丘衆万二千人、学無学二千人、菩薩苾芻訶薩八万人、帝釈天の眷属二万人、自在天、大自在天の眷属三万人、梵天王の眷属二千人、八龍王の眷属百千人、緊那羅王の眷属百千人、乾闥婆王の眷属百千人、阿修羅王の眷属百千人、迦楼羅王の眷属百千人、阿闍世王の眷属百千人が参集し、一切衆生成仏の法を聴聞する事を悦び、法華經の説法の間を守護する事と、法華經の行者を守護する事を誓うのであります。ですから、観念文には、大梵天王、帝釈天王、大日天王、大月天王、大明星天王、天照大神、正八幡大菩薩しか上げていませんが、これは諸天善神の代表者だけを上げて、連なる全員は列挙せず、惣じてと表現し、森羅万象全ての諸天善神が、法華經の行者の修行の場所である、この勤行の場に序品と同様に参集していますよ、一人で勤行をしていても、実は何十万もの諸天善神に守護されているんだという事を表現しています。

法華守護の諸天善神、(Hokkesyugo no syotenzenjin)

前記の、森羅万象の全ての諸天善神の事です。

諸天晝夜 (Shoten tyu-ya)

常為法故而衛護之 (Jyo-i ho- ko- niegosi)

法華經「安樂行品第 14」(開結 462p) に、

「諸天善神は昼も夜も、常に法の為の故に、しかも之を衛護す。」と、説かれています。意味は、諸天善神は、昼夜を分かつたず、常に法華經の行者なるが故に衛護します。ただ護ってくれるというのではなく、私達が法華經の行者として生きていなければ、衛護しないのであります。

※【正直者の頭に神宿る】という諺があります。道理にそって正直に生きる者を神は必ず守る。という意味であります。つまり、神は道理の所へ必ず宿り、道理を法味（食とし力を得る）とするのであります。道理とは南無妙法蓮華經の法であります。

の御利益、(no goriyaku)

諸天善神が法華經の行者を衛護してくれる御利益に対して、

法味倍增の御為に (Ho-mi baizo- no ontameni)

私は、増々法華經の行者として、南無妙法蓮華經の法味（食事）をもっともっと全ての諸天善神へ供えますので、諸天善神は法華經守護の任を忘れることなく果たして下さい。

(御題目三唱 Odaimokusansho-)

※朝夕二度の勤行で、朝だけ、初座（天拝）の勤行を、正面本尊に（鈴を打たず）御題目三唱してから、同じ場所で、真東に身体を向けて、方便品、十如是（三転読誦）自我偈、引き題目、観念文の勤行をします。終わって正面本尊に身体を向き直す迄、一切鈴は打ちません。朝だけというのは、諸天善神の食事の時間が早朝だからと言われてはいますが、諸天善神の代表的存在の大日天王が太陽と同意と解釈されている所から、太陽が昇る東天と早朝の来光から、象徴的に朝だけ、初座をする様になりました。そして、本尊に向かう事に先立って諸天善神に、これから南無妙法蓮華経の本尊に向かい、法華経の行者として修行をしますよ。法華経の行者を守護する誓いを立てた諸天善神も参集しなさいよ、という警鐘と、南無妙法蓮華経の法味を全ての諸天善神へ供えますよという通達の為に、本尊に先んじて行うのであります。鈴を打たないのは、鈴は哀音の為、諸天善神が嫌うので打たないと昔から口伝で教えられて来ましたが、哀音を嫌っているようでは諸天善神の務めは果たせません。真意は、東天に向かい手を合わせ勤行しますが、諸天善神を本尊として拝むのではない。本尊に向かう勤行と、諸天善神に向かう勤行は意味が違いますよ。という事を鈴を打たない事で表現しているのであります。

◎二 座

南無本門壽量品の肝心 (Namu honmon jyuryo-hon no kanjin)

日蓮大聖人の教えは法華経の中の迹門（在世の釈尊中心）と本門（釈尊滅後の妙法蓮華経中心）では、本迹勝劣で本門を取ります。本門の中でも中心となる壽量品第十六を取ります。壽量品の中でも文字面（文上）の壽量品でなく、真意（文底）の妙法蓮華経を肝心として取ります。

※身延日蓮宗では、釈尊が説いた法華経は迹門本門に勝劣は無く、本迹一致を主張します。釈尊も過去世において、仏から法華経を説かれて、その深い縁で仏になれたのですから、法前仏後（法は本然として前から存在し、その法を悟った人間が後に仏に成った）ですから、仏が本尊でなく、南無妙法蓮華経の法が本尊でなければいけないのであります。

・文底秘沈の大法 (Montei hichin no daiho-)

その肝心の法を壽量品の文底秘沈の妙法蓮華経を大法と言います。

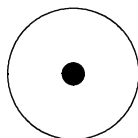
・本地難思境智冥合 (Honchi nansi kyo-chi myo-go-)

本地は本当の姿の意味。対境（妙境）となる、妙法蓮華経と、それを悟った仏の智慧（妙智）が冥合し一箇になった状態を、

・久遠元初 (Kuonganjyo)

三千塵点劫、五百塵点劫より昔に久遠元初が有ると、古さの競争で、古い方が尊く根本となる法に近く、より正しいと考えている人々が沢山います。久遠元初とは、そんなもので

はありません。真理の法に、古い新しい等は、無いのであります。森羅万象全ての生命は永遠常住、三世常住の色心で無量無邊ですから、元来形状に表現する事は出来ませんが、強いて例えば、森羅万象全ての生命を球体として考えます。



核となる真ん中の●は全ての生命の真ん中であり、全ての生命の真ん中ですから全方位、全ての生命の中心として繋がっています。真ん中、中心ですから、誰のものでもあり、誰のものでもない公界で自他彼此の無い存在です。数字で言えば0の存在です。永遠の未来、永遠の過去の真ん中。ここを基軸として三千大千世界が展開しているのであります。これが時間空間を超えた久遠元初概念であります。この中心が、仏界であります。地獄界・餓鬼界・畜生界・修羅界・人間界・天上界・声聞界・縁覚界・菩薩界迄の九界は自他此彼の世界、仏界は自他此彼の無い公界、仏界には A さんの仏界は、B さんの仏界よりも勝れているとか劣っているとかは無く、森羅万象全ての生命の仏界は中心の●一つなのであります。

・自受用 (Jijyuyu-)

【自受用】とは、ほしいままに(自由自在)受け用いるという意味です。仏が法を楽しみを自由自在に自ら味わうという表現用語です。【自受用】の反対は【他受用】で、他(仏)から受け用いるという意味です。衆生が仏から法の楽しみを与えて貰うという意味です。仏とは一切衆生成仏の法を悟った人ですから、人と法が一箇になった人であります。自由とは勝手気儘な欲望の赴くままに生きるという自由で無く、自ら悟った妙法蓮華經の法を根本として自由自在に振る舞うという意味です。【自受用】は、自らの生命に仏の生命が具わっている事に目覚め、妙法蓮華經の法を信ずる事によって、誰にも可能な成仏の境涯です。しかし、【他自用】は、仏に守って下さい、救って下さい、助けて下さいと縋り付き、自力を捨て、只々仏に任せる他力を要求されるのですが、成仏は他人の仏にさせて貰うものでは無く、自分に具わる仏の生命を自覚して成仏するものなのであります。任せるだけでは、自分の生命に具わる仏の生命に目覚め、成仏することは永遠に出来ないのであります。

報身如来の御當體(Ho-shinnyorai no goto-tai)

仏は三身(法身・報身・応身)を有すると説かれます。法身は真理そのものを示し、報身は法を体得する智慧を示し、応身は、生老病死の肉体の生涯を持ち、その時代、その国土の衆生に慈悲を施す働きを示します。

報身は、法と一箇する智慧と、生老病死の生涯をもち、日蓮大聖人は、法華經身読の、妙法蓮華經と一箇の生き方を一切衆生に身を持って示す応身の姿も重ね持つ立場になります。ですから、報身を中心にした、三身(法身・報身・応身)即一身(報身)、一身(報身)即三身(法身・報身・応身)として、報身如来の御當體なのであります。

※真言宗の本尊、大日如来は、真理を仏格化した法身仏で、仏を産む仏だと一方的に主張

します。阿弥陀如来も過去世、法蔵菩薩が 48 願を立て、阿弥陀如来になったと説きますから、人間が信心修行で法を悟り仏に成ったという仏では無いので、何の法を修行したのか、何の法を悟ったのか、そして何の法で衆生を成仏させるのか、まったく荒唐無稽で分かりません。キリスト教ユダヤ教イスラム教の神と同様に天地創造を主張し、絶対だ、偉大だと言っている事と同じになってしまいます。仏が法で、法が仏だと説いても、衆生に安心と、世の中に安穩を与える事は出来ません。ですから、凡夫の成仏の手本にはなりません。ただ仏に任せろという教えに成仏の道は有りません。法を悟った人間が仏に成るのであります。法が本然として仏よりも前に存在しているのであります。

・十界本有常住 (Jyukkaihonnu jyo-jyu-)

森羅万象全ての生命に、平等に、【本有】とは、本然として、ありのまま、常住に具わる十界互具の生命が妙法蓮華經の法そのものであります。

・事の一念三千 (Ji no ichinensanzen)

法華經に説かれた理の一念三千、妙法蓮華經が正法時代、像法時代を経て、末法の一切衆生成仏の法として明確に伝わるには、日蓮大聖人の法華經身読、人法一箇、師弟一箇（出世の本懐）を示し、十界互具の凡夫の身のまま一切衆生が成仏出来る法を示しました。これが事の一念三千です。（釈尊は、過去世に、法華經の説法を受けた縁と、法華經（出世の本懐）を説きましたが、法華經身読の法華經の行者として生きる姿は手本として示さなかった。）故に、上行菩薩に付属し、末法の一切衆生に妙法蓮華經の法を伝える様、託した。

・人法一箇 (Ninpo-ikka)

十界互具の凡夫と妙法蓮華經の法が一体になる事、成仏の姿。

・獨一本門 (Dokuichihonmon)

一切衆生成仏の唯一法。事の一念三千の事。

戒壇の大御本尊 (Kaidan no daigohonzon)

戒壇本尊は、熱原法難（師弟一箇の証・出世の本懐）を機縁として、日蓮大聖人が心に悟られた法魂、久遠元初、本因妙、一念三千、人法一箇、師弟一箇（出世の本懐・一切衆生成仏の法）を一切衆生に伝える為に顕された本尊ですから、日蓮大聖人の仏法の完成を示しています。目に見えない法魂を一切衆生に伝える為に顕したのが戒壇本尊で、戒壇本尊を通して、中味の法魂を想起し拝する事が、日蓮正宗の信仰です。いついかなる事情で、戒壇本尊が腐蝕し灰燼に帰しても、法魂（一切衆生成仏の法）は永遠常住であります。

戒壇本尊自体が法では無く、法を教え伝える為に戒壇本尊を顕したのであります。

・御威光倍增 (Goiko- baizo-) 御利益廣大 (Goriyaku ko-dai)

久遠元初、本因妙、一念三千の南無妙法蓮華經の功德は太陽の光の様に威厳を持って、全ての方位を照らし、増々この功德は広く大きな利益になって行きます。

御報恩謝徳の御為に (Goho-onshatoku no ontame ni) (御題目三唱 Odaimoku sansho-)

その事に対して、その恩に報いる為、今此処に勤行唱題しました。

※三寶 (法・佛・僧) の【法】を表す。

◎三 座

南無本因妙の教主 (Namu honninmyo- no kyo-syu)

帰依、帰命します。本因妙の法を一切衆生に初めて説いてくれた教主 (本佛) を、

※久遠元初本因妙の教主 (本佛) を、五百塵点劫より古い久遠より、地球も宇宙も人類も存在していなかった時から、完全無欠の仏として生き続けていたと考えている人達が沢山いますが、仏の教えは、そんな道理から外れた荒唐無稽な主張をしている神と同様の内容を説いているのではなく、森羅万象三千大千世界全ての生命の本質の法 (本因妙) を、末法に人間として現れ、末法の一切衆生に、身を持って一切衆生成仏の法を教えてくれ、法華経の行者として生きる姿が仏である事を手本として示してくれたから、本因妙の教主 (本佛) というのであります。

・一身即三身 (Issin soku sanjin)

本佛には、報身を要とし、一身に、法身、報身、応身の三身が具わっている。

・三身即一身 (Sanjin soku issin)

又、三身それぞれの特性が報身を要として一身に納まって、

・三世常恒の御利益 (Sanze jyo-ko- no goriyaku)

南無妙法蓮華経の御利益として、過去・現在・未来、常に三世に恒って、永遠常住に、

・主師親三徳 (Shusisin santoku)

仏は主人の徳、師匠の徳、親の徳の三徳という、生きていく上で必ず、その徳に頼らなければいけない徳を微塵も漏らす事無く兼備されています。

※主の徳は、キリスト教ユダヤ教イスラム教等という、この世の中の主という意味ではありません。

あくまでも、仏は、人間が生涯を送る中で、主人として、師匠として、親として導いてくれる、育み、導き、誠め、慈悲を掛けてくれる徳性を持っているという事であります。

大慈大悲 (Daiji daihi)

仏は、世間の慈悲よりも大きい慈心と悲心を一切衆生に対し平等に持っている

宗祖日蓮大聖人 (Syu-so Niciren daisho-nin)

日蓮正宗の宗祖として日蓮大聖人様は、

御威光倍増 (Goiko- baizo-) 御利益廣大 (Goriyaku ko-dai)

本因妙の教主（本佛）であり、その功德は太陽の光の様に威厳を持って全ての方角を照らし、増々この功德は広く大きな利益になって行きます。

御報恩謝徳の御為に (Goho-onshatoku no ontame ni) (御題目三唱)

その事に対して、その恩に報いる為、今此処に勤行唱題しました。

※三寶（法・佛・僧）の【佛】を表す。

◎南無法水瀉瓶 (Namu Hossui syabyo-)

帰依、帰命します。一切衆生成仏の妙法が師匠から弟子に、正確に伝承される理想の姿を、瓶の水が、次の瓶に注がれ移される形容で表現したものの。

※師匠も弟子も、同じ妙法蓮華經の佛性が具わる事に於いて平等であります。瓶は、人間の事で、水は、妙法蓮華經の仏性を形容しています。妙法蓮華經の法が主体の為、その妙法蓮華經に南無（帰依、帰命）との意味。

・唯我與我 (Yuiga yoga)

「唯我と我」と読む。方便品の「唯仏与仏」と同義。

久遠元初本因妙の法を身を持って示してくれた本佛日蓮大聖人と、その道を共に歩んだ、日興上人の妙法蓮華經の不二を、ここでは表現しています。総じて同じに本因妙の信心修行し貫く者は、凡夫であっても与仏であります。

※日興上人は、日蓮大聖人が富士岩本の天台宗実相寺へ「立正安国論」草案草稿作りの為、一切經閱覽に寄宿した時に法縁を得、天台宗の教えでは一切衆生成仏が叶わない事を悟り、日蓮大聖人の元に出家し直し、伊豆伊東流罪から、日蓮大聖人臨終迄、身に影が添うように常随給仕をされ、艱難辛苦を共にしました。その中で日蓮大聖人と共に法華經身読をされたのであります。加えて身延に建立した、日蓮大聖人の墓を守り八ヶ年とどまり、五老僧の謗法を戒め、身延離山し、謗法厳戒の信仰を貫く土地を富士上野に求め、大石ヶ原に大石寺の礎を日目上人、南条時光と共に九年間辛苦を重ね築き、後重須に檀所を作り、未来に一切衆生成仏の妙法を伝える為、竜象を育てる事三十五年。まさしく、唯一「唯我與我」の、名実共に亀鏡と認められるのは、日興上人と、熱原法難の農民（日蓮大聖人と信仰歴も学問、修行も違う、一文不通の最下層民として扱われる小作農民が妙法蓮華經の信仰者として、唯一妙法蓮華經の佛性を信じて生命を掛けて貫く、日蓮大聖人と同じ法華經の行者として生きる姿を示した。）のみであります。

大石寺の歴代貫主は、これほどの国家権力からの生命に及ぶ難も無く、その時代の役職、

僧階、法臘年数、多数決等々のヒエラルキー組織維持の人事配分で選ばれた立場でありますから、歴代の相承を「唯我與我」と同列に考えるのは日興上人、熱原信徒の足元にも及ばない不遜な事であります。師弟一箇、師弟不二是、師弟共に法華經の行者として妙法蓮華經の仏性を確認し合う事であり、師匠の言う事は、全て正しく、絶対服従を強いるに都合の良いものと履き違ひしてはならないのであります。現代の私達は、師匠も弟子も、みんな、日蓮大聖人、日興上人の弟子であるとの自覚を持たなければいけない立場であります。

日蓮大聖人の信仰は「師弟の法門」と言われますが、真実の法を求めて生命掛けで結ばれた師弟と、その地域に住んでいたから、その御寺で御授戒をしたとか、創価学会の謗法に気付いて交通の便を考えて、この御寺に所属したという縁の、師弟の関係では、縁の深さ重さが違うのであり、同列に考えるものではありません。

・本門弘通の大導師 (Honmon guzu- no daido-si)

久遠元初、本因妙、一念三千の法は、法華經本門文底に沈められた法ですから、その法を日蓮大聖人亡き後、弘通する中心の偉大な導師は、

・第二祖白蓮阿闍梨日興上人 (Dai niso byakuren ajyari nikko- syo-nin)

第二祖白蓮阿闍梨日興上人だけであります。

、御威光倍增 (Goiko- baizo-) 御利益廣大 (Goriyaku ko-dai)

本門弘通の大導師の、その功德は太陽の光の様に威厳を持って全ての方位を照らし、増々この功德は広く大きな利益になって行きます。

御報恩謝徳の御為に (Goho-onshatoku no ontame ni) (御題目三唱)

その御利益に対して、その恩に報いる為、今此処に勤行唱題しました。

※三寶 (法・佛・僧) の【僧】を表す。

◎南無一閻浮提之御座主 (Namu ichienbudai no onzasu)

・第三祖新田卿阿闍梨日目上人 (Dai sanso niidakyo- ajyari Nichimoku syo-nin)

帰依、帰命します。日蓮大聖人、日興上人に常随給仕され、法華經の行者として、久遠元初、本因妙の法を、身を持って指導された、第三祖新田卿阿闍梨日目上人は、比類ない、一閻浮提を代表する全ての座主の手本です。

、御威光倍增 (Goiko- baizo-) 御利益廣大 (Goriyaku ko-dai)

一閻浮提を代表する座主の、その功德は太陽の光の様に威厳をもって全ての方位を照らし、増々この功德は広く大きな利益になって行きます。

御報恩謝徳の御為に (Goho-onshatoku no ontame ni) (御題目三唱)

その事に対して、その恩に報いる為、今此処に勤行唱題しました。

◎南無日道上人 (Namu Nichido-sho-nin)

・日行上人 (Nichigyō-sho-nin)

帰依、帰命します。第四世日道上人、第五世日行上人

等御歴代の御正師 (to-gorekidai no gosho-si)

その後に連なる歴代の、久遠元初、本因妙、一念三千、人法一箇、師弟一箇の南無妙法蓮華經の法を正しく現在まで伝えてくれた御歴代正師の貫主の方々の、

※第 15 世日昌上人、16 世日就上人、17 世日精上人、18 世日盈上人、19 世日舜上人、20 世日典上人、21 世日忍上人、22 世日俊上人、23 世日啓上人の 9 代に渡る 100 年余り、釈尊を本尊とする京都要法寺より貫主を入れ、大石寺の法門は混乱し、日興上人の身延離山の遺誠を覆す事態になります。それでも、現在の石寺は、頑迷に、一器の水を一器に移すが如く、日蓮大聖人から今日貫主迄微塵の謗法も無く清浄に法を伝えて来たと言伝します。正師だけでなく、邪師もいたのであります。しかし、これらの歴史事実は、末法は全て十界互具の凡夫であり、生き仏など存在しない事を証明しているのであります。

近年では、昭和 53 年 4 月 15 日に日達上人に会い、相承を承けたと言う、阿部信雄師は、当日、日達上人と逢っている事実がないにもかかわらず 67 世を篡奪し、自らの発言を立証出来なかった。これも十界互具の凡夫の性を一切衆生に伝える標本であります。他山の石として、変毒為薬しなければならない。

、御威光倍增 (Goiko-baizo-) 御利益廣大 (Goriyaku ko-dai)

その功德は太陽の光の様に威厳を持って全ての方位を照らし、増々この功德は広く大きな利益になって行きます。

御報恩謝徳の御為に (Goho-onshatoku no ontame ni) (御題目三唱)

その事に対して、その恩に報いる為、今此処に勤行唱題しました。

◎御 祈 念

祈念し奉る (Kinen si tatematuru)

御本尊に南無妙法蓮華經の信心の志と共に祈り念じ奉ります。

爾前迹門の謗法対治 (Nizen syakumon no ho-bo-taiji)

法華經以前の四十余年の一切衆生成仏の法が未だ説かれない仮の教えと、法華經の迹門の教えは、未だ釈尊に対する尊敬が信仰の主体で、一切の諸仏が悟った法が南無妙法蓮華經の法であることが明らかにされていない為に、結果、一切衆生成仏の法を謗る謗法の教え

でした。これを対治し、

一天四海本因妙 (Ittsikai honninmyo-)

森羅万象、法界全てが、久遠元初、本因妙の、

、広宣流布 (Ko-senrufu)

森羅万象全ての生命に、法縁が結ばれ、

※未だに、世界中の人間が入信し南無妙法蓮華經の御題目を唱える事が順縁の広宣流布だと、眼に見える形での全人類が信徒になる事を広宣流布と思い込んでいる人々が大勢を占めていますが、広宣流布とは、イコール一切衆生成仏であります。御授戒を受け、御本尊を拝んで、信徒として所属構成員にカウントされても、成仏出来る信仰であるか否かは、眼に見えない瞬間瞬間に心変わりする十界互具の信仰心の世界でありますから、不確実であり不変固定化した順縁は無いのであります。

全ての衆生が御授戒を受け入信しても、十界互具の生命は全て逆縁であり、末法には逆縁の広宣流布しか無いのであります。全世界の人が入信する事が広宣流布では無く、人間界だけで無く、森羅万象全ての生命が久遠元初、本因妙の南無妙法蓮華經の一切衆生成仏の法に縁し、やがてその縁によって成仏する事が広宣流布なのであります。

異教徒を差別、区別、否定、廃除、弾圧、抑圧、殺戮したり、敵、害毒とする考える覇権主義の信仰では、心の平安も社会の平和も有り得ません。日蓮大聖人の示した久遠元初、本因妙の広宣流布とは違います。

、大願成就御祈祷の御為に (Daigan jyo-jyu gokito- no ontameni) (御題目三唱)

これ以上のものは無いという一番の大願は、一切衆生成仏であります。このことが、南無妙法蓮華經の法によって成就出来ます様に、自分もその事が叶います様にと、勤行、唱題をしました。

某 (Soregasi)

自分、他人、誰でも

過去遠々劫 (Kako onnonko-)

永遠の過去から、

現在漫々 (Genzai manman)

現在までの、大河に水が満ち流れ、どこまでも滔々と全ての生命に繋がっている、

の謗法罪障消滅 (no ho-bo- zaisyō- syo-metu)

永遠の過去から、意識、無意識共に久遠元初、本因妙の南無妙法蓮華經の法を信じないで逆らい謗法を犯して来た罪障を、久遠元初、本因妙の法に目覚めて、消滅させて下さい。

、現當二世大願成就の為に（Gento- nise daigan jyo-jyu no tameni）（御題目三唱）

現在の成仏、未来の成仏という永遠常住の大願が成就する為に。

※ここで、個人的な祈念が有れば行う。

自分が御本尊様に御祈念する内容が、周りに対して、迷惑や不幸を与える上で成り立つものや、妬み、憎しみ、恨み、嫉妬、呪い、復讐、人の不幸を願う等々の願いであれば、それは妙法に叶うものではなく、自分の欲望を叶える為の我儘であります。こういう類の御祈念は叶わない方が、法に叶っている事になります。

「叶ったら、広宣流布のお役に立ちますから」と御祈念すると、効き目が良いとか、「これだけ御題目を唱えているのに、願いが叶わないのは何故だ」と、御本尊を叱ったとか、御本尊を中心に信仰しなければならぬのに、自分を中心にする事が信仰だと吐き違いしている人がいます。

御祈念する前に、信心とは、自分を振り返り、妙法を根本にして、客観的に自分と、現在に至る道のりを見つめる事、そして、勤行唱題、御祈念と共に、まず一番に、自分が間違っ来て来た点を直す事が先決なのであります。その事に気付かせて貰う事こそ功德なのであります。それをせずして百年御祈念しても何も変わらないのであります。創価学会の様に選挙の勝利の為に御題目を唱え御祈念するなど、論外の外道であります。

妙法は私達が御祈念しなくても、私達に一番大事な事、大切な事が何かを御見通しであります。御祈念しなければ通じない事など無いのであります。

成仏を願う以上の願いがあるでしょうか。全ての願いは成仏の大願に包含されるので、成仏の大願を真剣に久遠元初、本因妙の題目を信ずる志を根本として一切衆生成仏を御祈念する事に尽きるのであります。

◎回 向

（鈴を打ちながら、過去帳に記載された当日の日付に順じて、日蓮大聖人、日興上人、日目上人、歴代貫主、種々法難の御報恩謝徳の御祈念を先にした上で）

當門流信仰の面々（To- monry- shinko- no menmen）

久遠元初、本因妙、一念三千、人法一箇、師弟一箇の法を信仰する人々、

・内得信仰の面々（Naitokusinko- no menmen）

信仰している事を事情があつて表明出来ないけれど、心の中では純粹堅固な謗法嚴戒の信仰の志を持って亡くなった人々

・各々先祖代々の諸精霊（Onoono senzo daidai no Shosho-ryo-）

それぞれ、先祖代々の諸精霊

、追善供養（Tuizen kuyo-）

先に亡くなった生命に対して、追つて妙法（善）の縁を送り、成仏の大願を願う。

證大菩提の為に (Sho-daibodai no tameni)

大菩提は正覺（真理を悟る）の事、證は證得の事で、真理を證に得る。成仏が遂げられます様に。

、南無妙法蓮華經

某 (Soregasi)

先祖代々の諸精靈 (Senzodaidai no syosyo-ryo-)

勤行する人から見て、先祖代々の諸精靈はじめ、先祖以外の、他人、動物（人間以上に癒し、励ましてくれたペット）、誰でも、自分の生命が、現在存在する為に恩徳を受け縁した、（命の恩人、育ての親、孤児院の先生、職人として芸人として技を叩き込んでくれた師匠等々）先祖代々の諸精靈を中心に、血の繋がりが無くとも、不可欠な諸精靈。

、追善供養 (Tuizen kuyo-)

先に亡くなった生命に対して、追って妙法（善）の縁を送り、成仏の大願を願う。

證大菩提の為に (Sho-daibodai no tameni)

大菩提は正覺（真理を悟る）の事、證は證得の事で、真理を證に得る。つまり、成仏の事でもあります。

（更に他の回向が有る場合はここにおいて行う。回向が終わるまでゆったり間隔をあけて鈴を打ち続け、御題目三唱）

◎乃至法界 (Naisi ho-kai)

全ての三千大千世界の生命に

平等利益 (Byo-do-riyaku)

この南無妙法蓮華經の法が平等に利益を及ぼし、

自他俱安同歸寂光 (Jitagu ando- ki jyakko-)

自他彼此の差別区別なく南無妙法蓮華經の法に同心にして、一切の諸仏参集の国土である常寂光土へ俱に詣ることが出来ます様に。

（と觀念し、鈴三打＜大・小・大＞御題目三唱にて終了）